

北スラウェシ日本人会
NORTH SULAWESI JAPAN CLUB

日本人会会報

Tarsius

タルシウス



第22号

第22号 目 次

1. 新年のご挨拶	大之木英雄	2
2. 新年のご挨拶	玲子 & ラフ	4
3. 入会挨拶	大貫 周明	5
4. 会員募集中	今泉 宏	6
5. 「メナド降下作戦」 山辺雅男著「海軍落下傘部隊」から抜粋		9
6. 日系人メモ	長崎 節夫	30
7. 駐在官事務所からの連絡 (マカッサル出張駐在官事務所)		33
8. 会員名簿		44
9. 編集後記		45

平成 24 年 元旦
新年御挨拶

マネンボネンボ慰霊碑責任者
呉水交会名誉会長
広島戦没者慰霊祭委員会会長
大和ミュージアム友の会会長
元空戦の集い常任幹事
大之木 英雄

ビトン日本人会の皆様、平成二十四年の新春明けましておめでとう御座居ます。
昨年も引続きマネンボネンボの慰霊碑の保全管理等について、皆様方の心温まる御気持ちで御世話戴き、誠に有難く、僭越乍ら戦死者ゆかりの旧海軍部隊、碑の建設を行った（元）海軍第十四期飛行専修予備学生 元山海軍戦闘機隊、並びに呉水交會を代表して心より厚く御礼申し上げます。

既に御案内のように、昨平成二十三年（2011年）は、祖国日本にとりまして今後永久に忘れることのできない悲惨な年で御座居ました。

平成 20 年（2008 年）のアメリカのサブプライムローンの崩壊から始まった世界金融危機が、先進各国中央銀行の懸命な努力によって漸く納まり、“さあ、今から！”と気合を入れた矢先、3月11日の東北の大震災と福島原発の大事故、そして近畿（奈良、和歌山）の大水害と相次ぎ、加うるにタイの河川災害によって、トヨタを始め進出日本企業は大打撃を受けるという有様——。病人が溺れかかった水面から漸く浮き上がったところを鉄棒で頭を殴られ、アップアップしているところに今度は丸太棒でしごかれて又沈む・・・という感じでした。

世界状況も振わず、EU（ヨーロッパ）ではギリシャの財政破綻を皮切りに不安、動揺相次ぎ、EUの組織が崩壊するのではないかと思われる程の緊急事態・・・。

このような状況の中で未曾有の円高と相俟って、日本経済は恐らく戦後最大の危機に曝されていると云っても過言ではないでしょう。

つい2~3年前迄は、日本経済の先頭に立って世界をリードしていたパナソニックなどの日本の電機業界は今、見る影も無く、コストは勿論、商品の開発力や生産技術力に於いても韓国の後塵を拝するという残念な状況であります。

圧倒的No.1 と思っていたトヨタを筆頭とする自動車業界も今やドイツ、韓国の追撃に遭って、追い越されるのは時間の問題と苦悶の日々は続いて居ります。

もっとまずいのは、日本国を統率する政治の貧困です。正直、今の日本はドン底と云ってよいでしょう。そして残念な事には未だ出口が見えないということです。

将来どうすればいいのか、政治的にも経済的にも対策が見当らないのです。

こういう暗い状況の中で、平成 24 年の新年を迎えたわけです。

さあ、今からが勝負です。

ドン底だから腹も決まってきました。之からが本当に「頑張る」時期です。

今年は辰歳。「昇り龍」になってこの未曾有の窮状を脱却したいものです。

昨年 12 月に「聯合艦隊司令長官 山本五十六」の映画が公開されました。

戦争は絶対いけません、70 年前（昭和 16 年）英、米、蘭、支、四ヶ国を相手にして立上がった日本国民のあの昂揚した意気込み、—— を思い出して頑張りたいものです。

小生もこの 2 月で満九十才になりますが、この生命ある限り、頑張ってもう一度朝日の昇るような祖国日本の力強い復興を見たいと思って居ります。

マネンボネンボの慰霊碑につきましては、今年も何分宜敷お願い申し上げます。

小生が 23 年間会長を務めていた呉水交會に於きましても、先日行われた幹事會に於きまして、“呉水交會としてマネンボネンボの慰霊碑についてビトン日本人會のお氣持を大事とし乍ら、少しでもお世話する”ことが決まりました。

同碑に関し、日本國海上自衛隊の練習艦隊が既に二度に亙り同碑に参拝し、司令官が献花した実績、更に今後の練習艦隊の訪問先が南方（オーストラリア方面）となった時はマネンボネンボに慰霊献花すると内定したことをふんまえ、「五年に一度の見当で有志がマネンボネンボの碑に慰霊参拝する」と決定致しました。

具体的になりましたら詳細ご連絡致しますが、その節は又何分宜敷ご指導ご協力下さいませよう心よりお願い申し上げます。

小生も体調が良いようでしたら、今年当り碑にお詣りし、又日本人會の皆様方にも御挨拶申し上げたいと念じて居ります。

平成二十四年、2012 年がビトン日本人會の皆様にとって良い年でありますよう心からお祈りして新年の御挨拶とさせて戴きます。

(以上)

北スラウェシ日本人会現役メンバーの皆様、および元メンバーの皆様方へ

ブナケン・チャチャ・ネイチャーリゾート

玲子 & ラフ

ご無沙汰しておりますが、お元気でお過ごしでしょうか。

こちらの現地で、帰国された日本で、あるいはまた別の国で、それぞれご活躍されていると思います。はやいものでまた師走！！ どちらにいらっしゃるにしてもどうぞお体に気をつけて良いお年をお迎えください。

来年もまたどうぞよろしく御願いたします。

2012年も皆様にとって素晴らしいことがたくさん起きますように！

追伸

一件お知らせがございます。日本でないと見られない番組の件ではありますが、今年またうちにテレビ取材が入りました。来年2月からテレビ朝日のCS放送「海からのメッセージ」で、当リゾートが出演する番組がはじまります。2年間で12回見せるそうで、CSに加入していない場合でも、番組放映日近くに“お試し期間”ということで、申しこめばフリーで数日はCS放送が見えるそうです。機会があればぜひご覧くださいね。

(カメラマン広部氏の動画サイト <http://www.youtube.com/watch?v=9giE4MpGmmo>

テレビ朝日サイト <http://www.tv-asahi.co.jp/channel/contents/info/0032/>)

ブナケンチャチャ ネイチャー リゾート

<http://www.bunakenchacha.com/jp/>

mail : infoj@bunakenchacha.com

Tel : 62-821-8829-4140 (Resort)

62-813-569-30370 (English) 62-812-4100-1624 (日本語)

Bitung に来て

大貫 周明

このたび、日本人会の仲間に加えていただく事になりました、大貫 周明(オオヌキ シュウメイ)と申します。どうぞよろしくお願いたします。

当地の方々からはオオヌキ・シュウメイという発音が難しいらしく、オヌキ！とかシュメイ！と呼ばれております。

簡単に自己紹介させていただきますと、生まれは石川県で、ずっと水産関係の仕事をしております。特に、マグロの仕事に長く携わっており、かれこれ18年です。今42歳ですが。。。

マグロと言っても、ここビトンで漁獲されているキハダマグロやバチマグロではなく、クロマグロを長年扱っておりましたので、キハダやバチに関してはド素人でございます。

マグロの商売と言っても、各地の漁師さんと仲良くなって買わせていただく商売でしたので、それはそれは方々へ行きました。アフリカ・メキシコ・地中海……ほとんど日本へは帰れずインドネシアは数えたら41カ国目でした。

私が初めてビトンに来たのは、今年の3月でした。知人に頼まれてマグロの検品をしました。当初、2週間程の仕事の予定でしたが、水揚げが少なかったり、品質が悪くなったりで、なんと、1ヶ月も滞在することとなってしまいました。

その後、ビザの関係で一時帰国しすぐにビトンへ戻りました。で、いつの間にかもう12月…全く予想もしていなかったのですが、いつの間にか当地でしっかりビジネスをしておりました。最初の頃は、しょっちゅうお腹が痛くなったり、野菜不足の為に口内炎に悩まされたりでしたが、最近は慣れてしまいました。

現在の主な仕事はキハダマグロを生鮮出荷したり、冷凍したり、ムロアジ・ミルクフィッシュの日本向けの輸出です。

当地では誰も知り合いがおりませんでしたが、色々な加工場へ出入りするうちに友達も増え、徐々に日本人の方ともご縁が出来て、お友達も多く出来ました。

水産物は水物ですので、いつまで当地で商売が出来るか判りませんが、まだ当分はビトンで皆様のお世話になると思いますので、何卒よろしくお願いたします。

自転車部員募集、活動記録

PT. Arta Samudra
今泉 宏

自転車部員募集していま～す！

綺麗な景色の中で風を切り汗を流した後のビールは最高です。

部員いまだに2名ですがメナドのMTBクラブとも交流があり、合同でサイクリングを楽しむこともあります。最近ではオフロードが中心になっていますが参加者の好み体力に合わせてルートを決めているので初心者の方でも安心して参加していただけます。

●ルート紹介

○トンダノーメナド

舗装道路

難易度 ☆☆

距離 30 km(?)

北スラ日本人会自転車部2人とメナドのMTBクラブのインドネシア人数人と合流し車でトンダノ方面へ向かいます。

前号で江田さんが紹介されていたマハウ山からのスタートです。マハウ山周辺は野菜などを栽培している段々畑が広がるとても景色のよい場所です。標高もかなり高いため冷涼な気候で自転車で走るにはうってつけです。

マハウ山からルルカン村まで田園風景の中を一気に駆け下ります。このメイン道路をそのまま下るとトンダノの町へ抜けるのですが、ルルカンで左に曲がるとメナド方面に抜けることができます。この道はあまり状態はよくありませんがかうじて僕のクロスバイク(街乗り用)でも走れる程度の舗装がしてありました。

この脇道には牛が沢山ロープに繋がれて草を食べているのですが、その中の一頭のロープが解けていて突然暴走し危うく突き飛ばされそうになりました。見慣れない自転車の集団に驚いたのでしょう。

このルートはほとんど下りなので運動にならないのではと思われるかもしれませんが意外と下るだけでも体力を使うのですね。最後は少し上りがありました。リングロードを越えてメナドの街へ入ってゴールです。

下り中心のこのルートは少し物足りなく感じましたがマハウ山、ルルカン村周辺は自転車で走るのに面白そうなルートがまだありそうです。

○ビトナーケマーマンケット海岸

舗装道路

難易度 ☆☆☆☆

走行距離 74 km

走行時間 5時間42分

とりあえずビトンからケマを目指すということで坂口さんと2人で出かけたのですが、ビトンーケマ間は起伏が少なくサクッ着いてしまったのでそのまま海岸沿いに行けるところまで行こうということになり結局走行距離74 kmというマゾヒスティックな記録を作ることになってしまいました。

ケマからは海岸沿いといっても道はほとんど山の中を通っているので起伏が激しくいくつも峠を越えなくてはなりません。しかし峠を越えるたびに海が見え、その景色がすばらしいので疲れも忘れひたすらペダルを漕ぎました。どちらかが止めようというまで走りつづけるのです。

そして35 kmほど走ったところでマンケットというきれいな海岸にたどり着きました。白砂のとてもきれいな海岸なのに住人は少なく食堂も見当たらないので売店でビスケットと飲料を買い込み砂浜で休憩を取りました。

これまでのケースだとこれぐらい走って満足したら坂口さんの運転手さんが車で迎えにきてくれるというパターンでしたが今回は運転手さんが休暇でいないということを僕はこの時に初めて知ったのです。そこで協議の末折り返すことになりました。

車で帰るものとばかり思っていた僕は、来た時と同じ道を自転車で戻らなくてはいけないことになり精神的にも体力的にもヘトヘトになりました。しかしなんとかケマまでたどり着き、そこで食べたかき氷の味は生涯忘れることはないでしょう。かき氷に浸して食べたパンも空腹を癒し体力を回復させてくれました。

このルート、自転車ではなかなか骨が折れましたが道路はかなりきれいに整備されているので車のドライブにもお勧めです。

○ビトンーコウディタン

オフロード

難易度 ☆☆☆

走行距離 50 km

走行時間 5時間

坂口キャプテンに勧められ MTB を購入しオフロード初体験をしました。

ルートはマネンボネンボの慰霊碑を越えたあたりから西に曲がりオフロードに入っていきます。ヤシやバナナ畑などの中を通っている農道です。ビトンー帯はだいたいそうなんですけどこの道も砂地が多く何度もタイヤが砂に埋まってしまいました。以前に怖い思いをさせられた牛たちにもたくさん出会いました。ここの牛たちは比較的バイクなどの乗り物を見慣れているせいか自転車を見ても驚いて暴走する牛には出会わずにすみました。途中橋のかかっている小川が数箇所あり MTB での川越えも初体験しました。

基本的にこの農道は本通りに沿っている道ですがこの辺りのヤシ畑は本当に奥深くまで開拓されていて牛車などが通る道が張り巡らされています。僕一人だったら確実に迷うところですが、坂口キャプテンはこの辺りを MTB で走りつくして道をだいたい覚えているそうです。

オフロード初体験ではありましたがそれほどきついルートでもなく自然を満喫しながら走れるので、楽しみながらコウディタンの町まで行き着くことができました。

コウディタンで腹ごしらえをした後はレンペアン方面へ少し走り、そこから南の方角へ伸びている小道へ入ると下りのオフロードになります。その道を下りきると水田地帯が広がっています。

水田地帯を越え本格的な山道に入ると、密林に迷い込んだようなスリルを味わうことができます。ところどころ車が通れる道も見られ山の中とは言ってもかなり開発の手が広がっているようでした。

この先にもまだオフロードはつながっているのですが初体験ということもあったので今回はその辺で折り返しピトンへ向けて帰りました。

オンロードで遠くまで走るのも楽しいですが、自然が一杯のオフロードをじっくり走るのも楽しいものです。そこに仲間がいたらさらに楽しさは倍増します。



太平洋戦争ノンフィクション・今日の話題社
定価1500円

海軍落下傘部隊

栄光と苦闘の戦歴
山辺雅男

海軍落下傘部隊

栄光と
苦闘の
戦歴



6

敵前降下!

昭和15年11月、著者に与えられた極秘命令は『4カ月で落下傘部隊ヲ完成スベシ』というものだった。海軍落下傘部隊に全生命を打ち込み、戦った著者の魂の記録。

幻の海軍落下傘部隊戦史、唯一の証言!!

今日の話題社/ノンフィクションシリーズ 定価1,500円

テスト降下

昭和十六年一月十六日未明。天候快晴にして微風。一月としてはまさに恵まれた絶好の降下日和。幸先よしと私たちは早朝から元気づけられた。

帝国海軍落下傘部隊最初の降下を決行するために、私はただ一人で九〇式機上作業練習機に乗り込んだ。中略

まもなく飛行機は誘導コースの一周を終え、富士山を背に陸上から海上に向けて定針した。……私は降下口に立った。脚を屈し、両手で機体の把柄を握り、身体をぐつと機外に乗り出す。乗り出した身体に一月の寒風が当り、頬がピリピリと軽く痙攣して痛い。手旗の真白い色が私の横目に映する。『降下せよ』

重苦しいような無我の上臈。身体が急に軽くなった感じだった。無我の中に手を放し、私の身体が機体を離れたのだ。……
(本文中より)

ISBN4-87565-119-8 C0095 ¥1500E

第三章 メナド降下作戦

開戦一番槍の夢

昭和十六年十一月二十六日。

落下傘部隊を乗せた新田丸が、深夜の東京湾をコッソリと出港して行った。

九州南端から、針路を台湾にむけて、ここで隊員は、初めて台湾進出を知った。

落下傘に明け落下傘に暮れた^{すそむ}憤懣の一年。急に閑になった身体を、ケビンのベットに横たえて静かに瞑想にふけると、研究途上、二十歳前の青春を散らして、殉職していった地丸三水の顔が、悲しく脳裡に浮かんでくる。そして館山基地の急速養成訓練で^{たぶ}斃れていった千葉一水や、数名の殉職者のことが……。『きつと仇は討ってやるからな』ひとり自分の心がいい聞かせながら、つい、胸の中が熱くなってくる。

第三章 メナド降下作戦

命知らずに見える元気な落下傘兵の胸に、夕暮の一時、淡いノスタルジャが訪れる。——故郷の

られた。

十二月一日、こうした楽しい平緩な航海を終えて、台湾高雄港に入港した。ここにはすでに輸送船団、護衛艦艇、陸軍部隊等がゴッタ返していて、戦い近しを思わせるに十分であった。

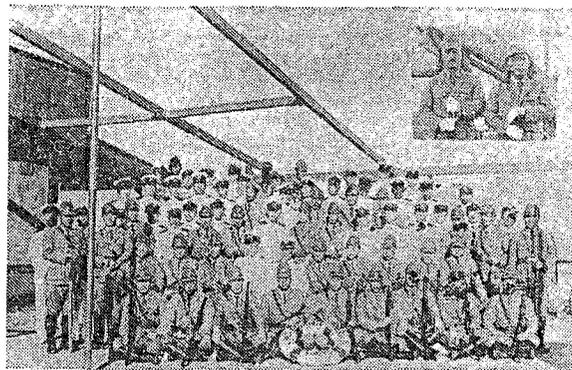
秘密保持のため、部隊全員で夜の間荷揚げを終了し、陸路、嘉義市郊外にある陸軍嘉義航空基地に進出した。ここには、陸軍部隊は一兵もなく、ガラ空であった。

森少佐を隊長とする輸送機隊も、我々と前後して、ここに勢揃いをした。

編成後なお日の浅い我々落下傘部隊は、出撃を目前に控えて、急速に練度の向上を計る必要があった。このために昼は主として降下訓練、夜は陸戦訓練を反復演習していった。

降下訓練は、輸送機隊との連携を緊密にして、呼吸を合わせることに重点をおき、極力実戦に近い状態で行うことにした。すなわち、敵の被弾を少なくするために輸送機隊は水平飛行を止めて、^{かんちゅうか}緩降下で人員と梱包を投下し、落下傘兵は、鉄カブトに全武装で降下した。

一里四方もあると思われる広大な嘉義飛行場の周囲には、これまた砂糖黍畑が、地平線の彼方まで垣々として展がっている。狭い海軍の飛行場ばかり見慣れていた我々は、満州の大陸にも似た、のんびりしたものを感じる。これなら海に落ちる心配もなく、まず一安心というところだが、その代り砂糖黍畑に降下すると、西も東も判らなくなり、その上、砂糖黍の毛が、いやっというほど顔に刺さるのには、強気の落下傘兵もいささか閉口した。



新田丸で戦地に向う落下傘部隊。

山河が父母の顔が、懐しく浮かんでくる。

九州南端の陸地が、長細い帯となり、やがて点となり、次第に後に消えていく。これが内地の見納めかと思うと、急に離別の悲しみに襲われる。

我々特殊部隊を優遇する意味で、当局が優先的に割り当ててくれた豪華船新田丸は、出港直前にプラスバンドをおろしただけで、あとはアメリカ通いの客船そのままの装いであった。私たちの部隊だけがこれを独占して乗船しているの、全員が二等船室以上の船室が当てがわれ、食卓にはアメリカの仕込みだと称するハムの寄贈が出されたりして、自費ではとても真似のできない、豪華な楽しい航海であった。

退屈しのぎに午前の半日を、銃剣術と手旗訓練に当てた。当隊には、日本海軍第一の仙野兵曹長をはじめとして、高段^{れんし}銃剣術の猛者^{もさ}が多かった。

奄美大島を過ぎてから、新田丸のプールに海水を入れてもらい、若年の水泳不能者の訓練を実施した。冬になるというのに、まったく温かい水で、もうだいたい南に來ているのだなあと沁々と感じ

「エエこそ、砂糖黍の根でも噛ってやれ」

ムツとする酷暑の中で、汗だらけになって噛るこの味はまた格別、これで少しはくしゃくしゃした胸の溜飲も下るといふものだ。

南国の強い太陽に照り映えて、キラキラと美しく、毎日純白の落下傘が、嘉義の上空に浮かんでいた。

「あッ、吹き流しが」

あの不吉の細長い白い棒の落下傘が、グングン他を追い越して、そのまま地面に打ち当たってしまった。

この頃は、堀内部隊と福見部隊が交替々々に、隔日に訓練に当たっていたが、堀内部隊の降下訓練の時だった。

私は、福見部隊の第一中隊長として、そのとき陸戦訓練をやっていたが、慌てて現場に駆けつけた。

「応急傘はどうしたのだ」

「出撃が近いので、持たせませんでした」

「この馬鹿野郎」

と怒鳴ってやったが、後の祭りだった。

落下傘降下は、前にも述べた通り、案ずるより生むがやすしといった性質のもので、五、六回飛び降りてしまうと、なんだ、こんなものかと馬鹿にして、なめてかかる傾向がある。それでは危い

ぞと、私が口を酔っぱくして注意をするが、鼻っ柱の強い士官の中には、馬耳東風といった恰好で、聞き流すものがあった。万に一つの事故防止に躍起になっていた私は、ときどき癢に触ることがあった。

(この時までの私の降下回数は約五十回で、海軍ではレコードである。レコードとしては少ない回数だが、開傘率百パーセントを期待できない時期だったので、やむを得なかった。)

この一年間、私は朝から晩まで、落下傘と睨めっこしてきた。一万に近い回数の落下傘降下を見てきた。他の人が見たら馬鹿と思うだろう。私の先輩の搭乗員で剽軽な人がいて、人をつかまえてはこんなことをいっていた。

「おい、俺の顔は馬鹿に見えるだろう。朝から晩まで馬鹿みたように、操縦桿だけ握って暮しているんだからな」

今にして思い当たるものがある。私もその馬鹿だ。だが馬鹿の一つ覚えというか、落下傘が、チラッと少しでも変ったなびき方をする、すぐにピンとその原因が解るような気がする。だから、不開傘の事故で、皆が青くなっているときでも、別に恐いとも思ったことはなかった。しかしそれと反対に、皆が開く開くと言って喜んでる時は恐ろしかった。

そのコツを指導者の立場にある士官にのみこんでもらって、極力未然に事故を防止し、貴重な人命を訓練で失わないようにすることが私の念願だったが、あまり効果がなかった。

やってみればそのうちに誰も解ることであるが、前車の轍を踏むことは馬鹿らしいことだ。この

点、飛行機乗りは、士官も、下士官も兵も、階級の区別なく、自分の力がそのままものをいう。勢に便乗して流されておればそれで済むというような他力本願は許されない。だから、鼻柱も強いが、もの解りがよくて打てばカンと響く。私はこうした航空隊の気風が大好きだった。そして羨ましいと思った。

創設以来、日の浅い落下傘部隊は、大いに学ばなければならぬところだと考え、また努めた。しかし人間は環境の動物である。私のこんな希望もやがて落ちつくところに落ちつくであろう。海軍落下傘部隊は、こうして生まれたばかりの雛であった。しかも日本海軍にはこの雛だけしかなかった。親どりのない雛であった。訓練は不足でも、どんな大鷲にでも飛びかからんとする。闘魂に満ちた世間知らずの無鉄砲な雛だった。そしてその雛に出撃の日が刻々と迫っている。

部隊長から、日米開戦の封密命令の概要を知らされた。世界をわがもの顔に、東洋にまでのさばっているあの、小面憎いアングロサクソンの土手っ腹に、今こそ積り積った大和民族の鬱憤晴らしの痛撃を、ガンと加えてやれる秋が来つつあるのだ。

それは来たるべきX日だ。

降下訓練で、一人の犠牲者と、十数名の内地送還を要する骨折患者を出してしまったことは、かえすがえすも残念なことであった。

私たちは、訓練の余暇、週に二回ほどの外出を許し鋭気涵養に努めた。

店頭には、ほんものの餛飩の入った饅頭がならべられていた。ボンカン、ペイユ等の柑橘類は食

放題だ。物資の詰まっているこの頃の内地とは、雲泥の差が感じられて、私たちの心を大いに喜ばせてくれるものがあった。

こうして、私たちはX日を待っていた。

「開戦一番槍は我々の手で」

「ここまで来ているのだから、我々の部隊が、フィリピンの一番乗りだ。その次は、タラカンかな」
私たちは、こう希望し、こう信じていた。

昭和十六年十二月八日。

早朝警急呼集のラッパが隊内に鳴り渡り、『X日発動、日米両国は、南太平洋方面で交戦状態に入った』旨が部隊長から発表された。

遂に来るべき秋が来た。今日の日のために私は海軍に入り、いかなる艱難も忍んできたのだ。

「落下傘部隊よりニコ小隊を派出し、速やかにバタン島を占領し、比島方面攻撃の味方機の不時着場を確保すべし」

この出動命令に接し、竹之内光男少尉（兵学校六十八期、サイパンで玉砕）の率いる二個小隊が、勇躍出発して行った。

それからしばらくして、突然、思いがけない情報が部隊長からもたらされた。

『今朝未明、味方機動部隊はハワイ奇襲に成功せり』

「やったッ！」

思わず感激の嬉し涙が溢れてくるのを禁じ得ない。

「万歳！」

部隊のあちこちで歓声が挙がり、しばし隊員は、感激の坩堝くわごに追い込まれたのであった。だが、俺たちの出動命令は、どうして来ないのだろう。開戦一番乗りを夢みて、意気込んでいた隊員の期待は、すっかりはずれてしまった。

何だか、急に全身の力が抜けていくような気持だった。

張り合い抜けとはこのことか。部隊の中から、落胆の嘆声が聞えてくるような気がする。諦らめなければならぬのだ。

「落下傘とは忍ぶことなり」

開戦劈頭へきとう、この苦言を味わわなければならなかったのだ。

比島ダバオに進出

台湾嘉義航空基地で、訓練待機中の落下傘部隊は、開戦とともに第十一航空艦隊の作戦指揮下に入った。

昭和十六年十二月下旬、先任部隊長である堀内部隊に、まず比島ダバオへ進出の命令が下り、残留の福見部隊員に送られて、勇躍懐しの嘉義の町を出発して行った。

横須賀航空隊での、最初の降下実験の時代から、実験主任としてたえず落下傘部隊の企画、指導に当たっていた角田少佐が、降下作戦の臨時参謀として横須賀航空隊より派遣され、嘉義を經由して飛行機でダバオに向かうところであった。

当時、私は福見部隊の先任中隊長であったが、これまで両部隊の降下訓練指導官として、訓練指揮に当たってきた関係上、この飛行機に便乗して、角田少佐とともにダバオにある十一航艦司令部に赴いた。

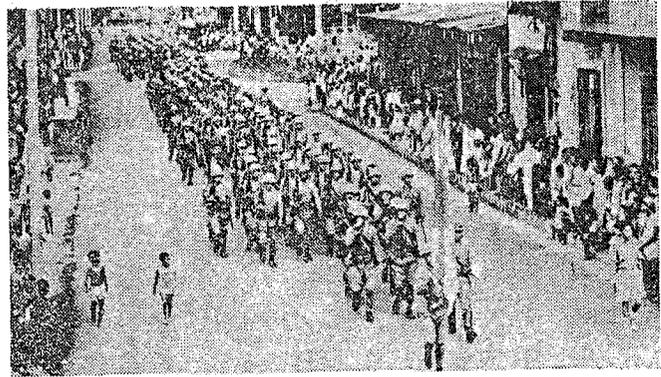
堀内部隊は、高雄港から加茂川に乗船、途中おりからの荒天に遭遇したが、危うく難を逃れて入港、ダバオ日本人小学校を本部として、哨戒配備に就いていた。

海岸には敵の船舶が擱坐かきざし、椰子林は赤く焼け爛れた、硝煙の香が生々しい。昼は屍に蠅がたかり、死臭で呼吸も止まりそうになる。

落下傘兵は、ここで日本人居留民からいろいろの話を聞かされた。

開戦後間もないころ、ダバオ攻撃に来た一機の九六式艦上戦闘機が、日本人の耕作する麻畑に不時着した。日本人農夫は、二十歳ぐらいの若い搭乗員を倉庫の中に隠したが、遂にフィリピン軍の探索の手が伸びてきた。この農夫に迷惑のかかるのを気の毒に思った屋乗員は、兇悪な人食い人種の住むという南方山地に入ろうとしたが、途中運悪く敵兵に発見され射殺されてしまった。

また、開戦とともに日本人居留民は全部強制収容された。そして、毎夜若い日本人女性が、人妻が、一人一人フィリピン土民兵に連れ出されて暴行を加えられた。そして中には自殺した婦人もあった。



ダバオに進駐した海軍陸戦隊

また自分の妻が汚されたのを怒り、フィリピン土民軍の兵舎に暴れ込んだ日本人の夫は、逆に射殺されてしまった。日本人居留民の留守家屋は、土民の掠奪に遭い、あるいは火を放たれた。

いま日本軍に救助された日本人居留民が、涙ながらに語るこれらの話を聞き、若い落下傘兵の胸は、敵愾心で一杯になり、戦いは必ず勝たなければならないと泌々と感ずるのであった。

夜間の哨兵勤務では、スコールと藪蚊でさんざん悩まされ、野豚や水牛の出現に驚かさされる。落下傘の乾燥場も、折り畳み場もないので、不便を忍んでこれを映画館の天井に吊って乾かし、広そうな民家や華僑の店を借りて、折り畳まなければならなかった。落下傘部隊のダバオ進出が、こんなことで敵側に漏れないとは断言できない。

こうするうちにも艦隊司令部、落下傘部隊幹部の間では、セレベス島メナドのカカス（ランゴアン）飛行場奇襲占領の計画が、着々と進められていた。

十七年一月十日。

堀内部隊長および各中隊長は、中攻に同乗してカカス飛行場の高々度偵察を行ない、地形確認をした。その結果は、

「敵飛行場には、障害物、敵影を認めずとのことであった。

すでにメナド沖に潜航配備に就いている味方潜水艦からは、無線で附近の天候を刻々と連絡してくる。

「天候晴れ、微風」

まず天候は降下最適、幸先よしというところである。

その日の夕刻、ダバオ日本人小学校の仮兵舎に総員集合が令せられ、作戦命令が下された。上海陸戦隊から中支の厦門根拠地隊へと歴戦のベテランであり、自他ともに体操の神様と称する海軍体操生みの親でもある堀内豊秋部隊長の、スポーツマン的な声が次々と命令を発していく。一杯にひきしぼられた弓のような緊張感が、降下部隊全員を包み、咳音一つさえきこえない。

思えば苦難の二年。今こそ実弾を抱いて敵陣へ天降るのだと思うと、名状しがたい感激に身体が震えてくる。

「大隊命令」

一、セレベス島ミナハサ高地、ランゴアン飛行場守備の敵は、戦車を有する有力部隊の如くなり。

- 二、我が大隊は、明早朝、味方水上艦隊掩護の下に、メナドおよびケマ港地区に対する佐世保鎮守府連合陸戦隊の敵前上陸に呼応して、天然の要害ミナハサ高地ランゴアン敵飛行場に、落下傘降下を決行し、所在の敵を撃滅して付近一帯を占領確保し、もって友軍航空部隊の進出を容易ならしめんとする。
- 三、第一中隊は、飛行場占領せば、ただちにランゴアン市街に進出占領し、状況許せば、メナド街道上の要衝を確保すべし。
- 四、第二中隊は、カカス街道を東進、カカス水上基地を占領確保し、味方水上機との連絡に努めよ。なお、将校斥候を派遣し、トンダノ市街方面の敵情を偵察せしむべし。
- 五、第三中隊は予備隊となれ。
- 六、合言葉「山と川」

余は、大隊指揮小隊を率い、概ね第一中隊と共に有り。

大隊命令にひき続き、更の中隊長から小隊長へ、分隊下士官へ、兵へと、明日の降下戦闘の命令と計画細部にわたり伝達されていった。

今日、落下傘兵は一日中飛行場へ通い、兵器梱包を輸送機に取り付けた。

準備はすでに完了。あとは明早朝、輸送機に搭乘するだけである。

敵B17の編隊が、ダバオ湾の味方重巡部隊の夜間爆撃に飛来し、灯火管制のため室内は蒸し暑い。その中で落下傘にお神酒を供え蚊を追い払いながら、一人半本あてのビールで軽く乾杯し、明

日の奮闘を誓った。所在の入船部隊が、哨兵配備を交代してくれたので、今晚は蚊蚊のために顔がはれ上がる心配もないし安心して寝れる。

早目に就寝したが、蒸し暑さで身体がビッシヨリと濡れ、なかなか寝つけない。故郷が、軍港の彼女が、ウトウトとまどろまぬ夢の中に浮かんでくる。こうした寝苦しいダバオの夜も、消灯とともに静かに次第に更けていった。

目指すはセレベス島ミナハサ高地

眠りにくい夜が過ぎた。

明ければ昭和十七年一月十一日。

落下傘兵は、早朝に起床し、椰子の木陰から故郷の人たちに最後の別れを告げる。

雨がシトシトと降り、なんだか不吉な感じがする。小雨に煙る曉闇の中を、椰子林を縫って落下傘兵は自動車で飛行場に到着、片腕の塚原二四三航空艦隊司令長官の激励と訓示を受けて、搭乗員とともにそれぞれの輸送機に搭乘した。整備員の合図でたちまちエンジンが始動され、曉の静けさを破った。

おのおの落下傘兵十二名と、兵器弾薬をギッシリと詰めた梱包数個を数載した九六式輸送機（九六陸攻を改造したもの）が、一番機から順次に滑走路へすべり出して行く。搭載重量最大一杯々々

の輸送機は、途中の傾斜面の滑走路でバンドしながら、危くも滑走路の最後のギリギリのところまで離陸していく。

「総員帽を振れ」

陸上の見送りに応えて、落下傘兵が機窓からハンカチを振っている。

輸送機は一機また一機、航空灯を消して上昇にはいる。轟々勇ましい爆音は、ようやく明けんとする朝の爽やかな大気を震わせ、三十数機の大編隊が整然たる隊形を整えて次第に空の彼方に消えていった。

(以下メナド戦の項は、第二期研究員でこの戦闘に参加した新木正氏の証言と、作戦終了後の部隊報告とに基づいて記録した。)

「皆さんさようなら」

落下傘兵は、飛行場の人影が見えなくなるまでハンカチを振り続けた。

機外に目を転ずれば、広大な椰子林がダバオ湾が、美しく絵のように脚下に展がっている。

機は高度を上げて雲上に出る。一望雲また雲だ。急に寒さが加わってくる。

機内は、いつのまにか静かになって、ピューンというアンテナの音と爆音だけが、聞えてくる。

落下傘兵の中には、じっと目を閉じて何か瞑想にふけている者もある。十八歳そこそこの、この一番年少の落下傘兵の顔を見ると、いじらしいような感に打たれる。

あと数時間後には敵陣に突っ込むんだ。恐らく生還はできないだろう。だが落下傘部隊の初陣で

死んだと聞けば、故郷の父母も悲嘆のうちにも少しは満足してくれるだろう。

突然、スコールの雲の中に入った。機窓に稲妻が光り雨が吹き込んでくる。命より大事な落下傘

が濡れては一大事、落下傘兵は座席側の落下傘に身体を乗

せかけて、濡らすまいと必死になってかばっている。

降下地点の天候が心配になってきた。

ふと機外を見れば、機は海面すれすれだ。白波が今にも

機を呑んでしまうかのように逆立っている。

暴風よ、どうか静まってくれ……ひたすら心の中で祈る。

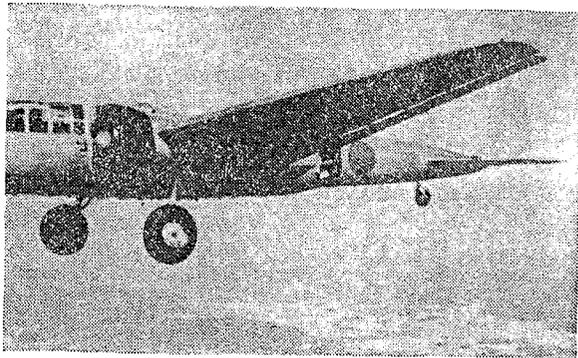
パッと、紺碧の晴れ間に出た。今までの暴風はなんだか嘘のような気がする。

機は直ちに上昇に移った。

振り返れば、真黒な雲の壁が、後ろに聳えている。

眼下には、黒味を帯びた青い海上を味方水雷戦隊が白波を蹴立てて単縦陣でセレベス島の方へ直進して行く。我々の作戦を掩護する護衛艦隊の一部だ。

前方では、搭乗員が黙々と操縦桿を握っている。



落下傘部隊を乗せて飛行中の96式輸送機、降下時の速度調節のため車輪を出している。

「オイ、頑張れよ」

お互いに手を振って合図する。

セレベス海峡上空で菓子を食べてポケットの水を飲む。冷たくてなんともいえない美味い味がする。

偵察員の右手が動いた。

「セレベス島近し」の手先信号だ。

「いよいよ来たぞ」

ジャケット（救命胴衣）を脱ぎ、格納袋から落下傘を取り出し、点検して背中に装着する。更に互いに背中の落下傘を点検し合い、肩を叩いて力強く、「よし」と叫び交わす。

落下傘バンドの着脱金具の安全鉤（着脱金具のケッチを手で押すと、落下傘バンドが身体から取りはずせるようになるが、航空事故で負傷し、空中でもがいている場合、無意識にこの金具に手が触れ、折角落下傘が開いて人間が助かっているにもかかわらず、落下傘バンドから身体が抜け、黒玉となって人間だけが墜ちま死んだ例があるので、この安全鉤を起さないと、着脱金具は作動しないようになっている。一種の安全装置である）をパチンと閉じると、身の引き緊まるのを覚える。

偵察員が指さす方向に目をやれば、目的地セレベス島の山々が、黒く見えはじめている。朝日はすでに高く昇り、まばゆいばかりに機内に射し込んでくる。

同志討ち

操縦員席が、急に慌ただしくなった。

「敵機来襲！」

五番機は、すでに機銃を射ちはじめている。

さっと鷲のような影が、機の右舷をかすめて、上方へ消える。しばらくして敵機は一旋回、またも襲いかかってくる。

ダダダダダ、ダダダダダ……………

敵味方の機銃音。

「アッ、味方機だ、同志討ちだ」

搭乗員が急に叫び出した。急いで機外を見れば、フロートを着けた味方零式観測機が、右下方に旋回していくところだ。

「馬鹿野郎！」

搭乗員と落下傘兵は、声を合わせて大声で怒鳴った。

「なんという青二才の、間抜け野郎だ」

危いところだった。

だが五番機は、すでに真黒な煙を吹きながら、次第に高度を下げて行く。

「陸地までの辛棒だ。五番機頑張れ」

味方の声援も甲斐なく、ついに両エンジン炎に包まれた。

さっと、五番機の跳出口が開いて一人、二人、三人……落下傘兵が機外に脱出していく。瞬間、自動曳索（飛行機の機体にひっかけて、人間が空中に飛び出すと、自動的に落下傘を引き出して開かせる約五メートルの索のこと）が炎で焼き切れて、開傘不能、そのまま落下傘兵は黒玉で落ちて行く。

高度六千メートルくらいか、次第に小さくなってやがて黒点となり、吸い込まれるように、下界に消えて行った。

「我れ自爆す——」

五番機は、無電を発して炎の尾を曳きながら、なおも海面に突っ込んでいく。

海上千メートルくらいか、五番機はついに爆発した。

ぱっと白い落下傘が五ツ、空中に放り出された瞬間、たちまち火の傘となり、一ツ、二ツ……と焼け落ちて行く。

翼がキリキリ旋回しながらこれを追い越して海中に突っ込み、黒煙を上げている。

更に他の一機も、同じ状態で墜落した。

海中に黒煙が数条立ち昇っている。味方駆逐艦がこれを目掛けて救援のため、全速で走って行く。

あっというまの出来事であった。

海中に白く浮かんで見えていた落下傘も、間もなく海中に没して消えてしまった。

この輸送機に乗っていたのは二中隊の三小隊員の約二十四名であろう。戦場を直前に見ながら、味方機の犠牲となろうとは、夢想だにしなかったことだ。ただ無念の涙が込み上げてくる。

「二中隊三小隊の犠牲者よ、一〇〇一空（輸送機隊をこう呼んでいた）の搭乗員よ、きつと仇は取ってやるぞ」

敵陣直前の上空で、落下傘兵は齒をくいしばって心に誓うのであった。

ランゴアン飛行場殴り込み

輸送機はすでにメナド上空だ。メナド港も反対側のケマ港も、味方上陸支援艦艇の攻撃で炎々たる火を発し、黒煙は中天まで上っている。

しかし砂浜には、のんびりと静かな波が押し返しては返し、緑一色の椰子林は、眠るがごとく寂として眼下にひろがり、自然の風物だけは戦火をよそいとも落着いた姿だ。

機は、ガラバット火山上空。

故国をしのんで、日本人が別にセレベス富士（またはメナド富士）と名付けたのだそうだ。

輸送機は水平飛行の編隊を解いて、突撃隊形をとる。

落下傘部隊本部を乗せた第一編隊は、すでにはるか下方。続いて一中隊を乗せた第二、第三編隊。第二中隊を乗せた第四編隊（新木正氏搭乗）が続く。

耳がキーンと鳴り、機体がブルブルと振動する。先頭の岩岡兵曹が跳出孔を開く。

下方トンダノ湖の濁った水が、グングン浮き上がってくる。

全員機内に立って、自動曳索の茄子環（フック）を機体に引っかける。

西方密林の山々が、機より高くなってくる。

「ブー、ブー」

ブザーの長二声。降下コースに入った。

高度、百〇百五十メートルか。

振り返れば、落下傘兵の顔は緊張のために青い。

ぐっと頭を起して、機は水平飛行に入った。

「トン、トン、トン」

降下用意を示すブザー短三声。

兵器梱包を突き落して、先頭の岩岡兵曹が降下孔に身体を乗り出す。

間髪をいれず、ブザー長一声。

「ツー」

降下の信号だ。

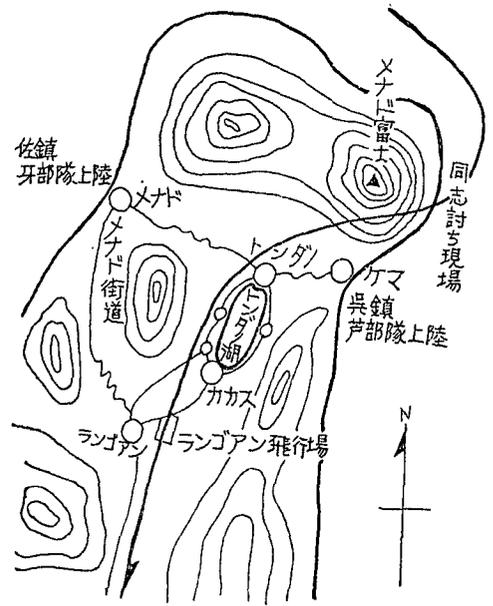
「エイッ」

と叫んで、分隊下士官岩岡兵曹に引き続き、軽機射手の荒木兵長（荒木正氏）が上空目がけてふみ切る。

続く服部上水、神田兵長、石井、菅原、大貫三水、井上上水、鞠地、小内山三水、石井兵長の順。（この分隊員十一名のうち、岩岡兵曹、石井、菅原、大貫、鞠地三水は、サイパン島で、神田、石井兵長、小内山三水は、カカスその他セレベスで戦死。）

鉄カブトの重みで空中でまっ逆さまになる。白い傘が伸びるのが見える。とたんにガクンと衝撃を感じて、まっ逆さまの身体が百八十度ひき起された。

「開いたぞ」



第一の関門突破。滑走路東方だ。

落下傘の振れが大きく、地面が斜になってグングン持ち上がってくる。

ダダダダダ……

ヒューン、ヒューン……

敵弾が身体をかすめ、落下傘を貫いて行く。

滑走路は、一面の拒馬きまと鉄条網だ。昨日の偵察では何も無いとのことだったが……。

「さては、敵の術中に陥ったか」

飛行場一帯敵味方の乱戦だ。

ダダダダダ……

ドーン、ドーン。

彼我の機銃音、手榴弾の炸裂音が、ゴツチャに混同して唸りを発する。

味方零戦が、地上すれすれまで突っ込んでくるが、敵味方の混戦では射撃もできない。

時刻〇九五五。

味方本部は、敵トーチカの約三十メートル直前に降りてしまった。敵は、飛行場西側の八個のトーチカから、たえまなく機銃を射ちまくる。

至近距離からの敵の機銃弾は正確、弾道は低く、パイアを打ち倒し草を薙なぎ倒し、拒馬を射ち貫いて、地面すれすれに伏せて前進する味方に迫る。

味方は飛行場の平川地に着地して、拒馬、鉄条網に前進を阻まれ、投下された梱包ははるかに遠く、わずか手榴弾と拳銃だけで応戦せざるを得ない。

蜂の巣のごとく射ち貫かれた落下傘が、鮮血で真紅に染まり、主人の落下傘兵を着けたまま、泥にまみれて悲しげにしぼんでいる。

(後の調査によれば、落下傘の被弾の最高は、第一編隊に搭乗した大隊本部小隊員の九十六発)

滑走路に着陸した味方は大半薙ぎ倒され、生き残りの落下傘兵は、鉄カブトの縁とジャックナイフで地面を掘り、頭だけ隠すのに精一杯。

気丈の副官染谷秀雄大尉(兵学校六十一期)が、手榴弾を発火して猛然と立ち上がり、何糞ッ!と、敵トーチカの銃眼目がけてこれを振り上げた瞬間、敵弾は蜂の巣のごとく染谷大尉の身体を貫いた。

「副官しっかりしろ」

傍で叫ぶ堀内部隊長(終戦後、戦犯として絞首刑となった)も、敵の銃眼三十メートル直前で身動きさえ出来ない。

第二編隊から降下した一中隊長牟田口豊中尉(私と兵学校同期生)は、敵飛行場上空で先頭に立って兵器梱包を突き落していたが、梱包にはね飛ばされてそのまま空中に放り出され、降下高度百二十メートルの低空では施す術なく、続く伝令一名とともに、不開傘のまま敵トーチカ直前に白煙を上げて、まさに完全な肉弾となって体当たりをしてしまった。

飛行場南方台地には、敵戦車隊が進出して、飛行場の我が軍に戦車砲弾を打ち込んでくる。北方カカス街道を敵装甲車が全速で走りつつ、機銃弾を浴びせてくる。落下傘部隊の先頭編隊の大部分は、完全に包囲された恰好で、敵弾のために身動きができない。

指揮小隊の神田兵長（新木氏と同年兵、後サイパン島で玉碎）は、よく人を笑わせる飄忽者だったが、敵前で兵器梱包に取り着いたが敵弾が激しく武装することもできない。やむなく梱包と列んで敵と反対側に身を伏せ、ソロソロと敵に感づかれぬように落下傘をたぐり寄せ、梱包と一緒に頭からすっぽりと被ってしまい、敵眼を誤魔化してすっかり武装を整えてしまった。やおら落下傘の下から目だけ出してみると、敵は全然気が着いていない。しめしめといきなり落下傘の中から、敵銃眼めがけて不意打ちを喰わせ、これを沈黙させてしまった。敵前で全武装を整えたのは、彼が一番早かったらう。

宮本兵長は、空中で股を射ち貫かれ、着地したが立つことができない。伏せた滑走路は焼けるように暑くジリジリと油汗と悔やし涙が顔面に流れる。敵味方の銃声も味方突撃の喚声も、夢のように聞こえて、いつしか気が遠くなっていった。

大隊付士官戦死、大隊指揮小隊長重傷。二中隊一小隊長三浦政喜少尉（兵学校六十八期）は、敵前百メートルで、双眼鏡で偵察中、双眼鏡もろとも顔を射ち貫かれて即死、伝令の佐久間上水も、頬を貫通されて戦死。他の伝令高木兵長が、ベルグマン短機銃を連射しつつ救援に近寄ったが、股を貫通されて炎熱の大地にバツタリと倒れた。後に、敵オランダ将校と組み討ちしてこれを

刺殺した柔道三段の猛者、新木兵曹が小隊長の側に匍匐前進して救援に来たが、すでに致し方なし。

敵はどうも味方将校を狙撃している模様だ。

この敵弾雨飛の中で、敵の射弾がなくなるのを待ってか、あるいは味方後続編隊の降下来援を待ってか、敵弾で身動きできぬ間、ちよっと一ぶくと煙草をふかしたのもいた。

第三章 メナド降下作戦



またこの敵弾の中に、飛行場の真中を拳銃を握ってうろろう歩き回っている十八歳くらいの若い三等水兵二人を星先任下士官が認めた。

「危い伏せる！ 何をやっているんだ」

「はい、兵器梱包を捜しております」

星先任下士官はとっさに走り寄り、二人を突き飛ばして伏せさせた。

「敵弾はどっちかわかってるのか」

「全然わかりません」

敵のトーチカはあれとあれだと教え

ながら、トーチカを目標に前進したが、この若い二人はついに敵弾に斃れてしまった。初陣というものは、敵弾に当ることがどうもピンとこぬらしい。

着々と武装を整え立ち直ってきた味方は、漸次敵を圧しはじめた。敵トーチカを包んで、味方の弾が土煙りを上げだした。

味方輸送機が、次々と落下傘兵を降下させていく。

第六、第七編隊の落下傘兵が、このとき、敵トーチカ群の直上と背後にかけて降下した。原田上水の下から、パッパッと敵弾が傘を貫いていく。拳銃を構えたがどれが敵だか判らない。下は椰子林だ。こいつはいけないと吊索を引っぱって傘を横江りさせたが間に合わず、椰子の葉が足をかすめたと思ったとたん、高い椰子林にぶら下げられてしまった。

下は敵味方の混戦、しばらく見とれていたが、思い切ってブランコをやって椰子の幹に抱きつき、これを伝って地面に江り降りた。敵トーチカのちょうど背後だ。ここに敵の自動車があったので、エンジンに拳銃弾を打ち込み、付近に降下した味方と一緒に、敵のトーチカの背後から攻撃をかけた。意外の攻撃に敵はびっくり仰天したらしく、手を挙げてトーチカの外に飛び出して来たが、これを射殺してしまった。

ある、若い落下傘兵は、敵トーチカの直上に降下した。滑走路では味方が突撃に立ち上がったところだ。なんだか俺が味方にやられるのではないかと不安になったが、思い切って交通壕から敵トーチカの中へ手榴弾を投げ込み、急いでポケットから日章旗を出して振り続けた。飛行場の味方が

これを見て、間髪をいれずに走り上って来た。

「おい、よくやったぞ」

トーチカの中を覗いて見たら、敵兵が十人くらい折り重なってたおれていた。

大貫三水は、飛行場南方草地の牛の背中にどしんと降下した。牛も不意を突かれて飛び上がったが、こちらも蹴られては大変と慌てた。傘を外して立ち上がった時にはすでに、牛は敵弾にたおれ、お蔭で蹴られずに済んだ。しばらくして敵戦車のキャタピラーの音が聞えてきた。もはやこれ迄と牛の腹に隠れ、手榴弾を握りしめて、これと刺し違える覚悟をしたが、戦車は遠のいてしまった。

背後と直上からの味方の奇襲に、トーチカ内の敵は度肝どきまを抜かれ、浮足立った。

敵の銃火は次第に減っていった。

「この機を逃すな」

第二中隊長齋藤中尉（兵学校六十七期。サイパン島で玉碎）が、白刃を閃めかせて立ち上がる。続く及川二小隊長、高橋中隊付、生き残りの面々。このときはじめて味方突撃ラッパが飛行場に勇ましく鳴り響いた。

たおれる味方を飛び越え敵トーチカに殺到した。ついに死角に入った。敵銃眼に銃口を突込み、ダダダ……と射ち込む。手榴弾を投げ込む。ガガガ……ガン。閃光を発して爆発する。狭いトーチカの内では、手榴弾の威力は倍加する。即死する敵。逃げ出す敵、フラフラと出て来る敵は、た

ちまち刺殺された。

各所で陣内戦が展開されている。

ついに敵トーチカの群は全滅した。トーチカを完全に占領した味方は有利な態勢となった。南方面のトーチカの敵は、密林を利用して自動車で逃げだした。これを追撃する味方の弾の音も、急に活気をおびた感じだ。

敵戦車も装甲車も、味方の肉薄攻撃を恐れて、退却をはじめた。

「ああ、速射砲が欲しい」

破甲爆雷を抱いて地面に伏せ、攻撃の機をうかがっていた十九歳の若い三等水兵が、涙を流して口惜しがった。

浮足立った敵は、勇氣百倍した落下傘部隊の敵ではなかった。飛行場一帯の敵はことごとく敗走し、味方はいかに飛行場を完全占領した。

重傷者は戦友の背に負われ、救急の手当を受ける。敵味方がゴロゴロと転がり、早くも大きな蠅が群集している。

中隊長を失った一中隊は、頭部に負傷したが、氣丈な先行小隊長の米原三郎少尉（兵学校六十八期、のち自決）の指揮下に、ランゴアン市街に突入して完全占領。

斎藤中尉のひきいる二中隊は、カカス街道を東進して敵水上基地占領に向かった。

これよりさき、カカス街道に向かった大隊指揮小隊の斥候小林兵長は、前方百メートルの道路上

で敵装甲車と遭遇し、単身これと射ち合いとなった。敵弾は土煙を上げて小林兵長の周囲を包んだが、歯をくいしばって頑強にこれと応戦を続け、ついに敵銃眼に命中させて運転兵を射殺し、なおも車上の敵をなぎたおしてこれを占領、味方尖兵がこれを逆用して新たな戦力を加えた。

午後、二中隊はカカス市街入口に達した。急造の敵トーチカから射撃を受ける。九二式重機銃が前進して敵銃眼がけて連続点射を浴びせるや、敵は交通壕を伝っていち早く退却した。更にカカス街道上の味方前衛尖兵は、右側三十メートルの密林の家の垣の中から不意に急斉射を喰らった。

瞬間、石井兵長、小山内三水は胸部を貫通され、声もなくなつた。新木兵長、服部上水はやにわに道路上に立ち上がり、軽機銃を腰溜め射撃でこの敵にぶつ放す。バナナの葉がザ、ザと銃弾に射ち貫かれて飛ぶ。敵はまた敗走しだした。

敗走する敵の声を追って、靱江、今野、塚本、野口の四つの重擲弾筒が、一斉に火蓋を切った。

ガ、ガ、ガ、ガ、ーン。

空気を裂くかのように破裂する。

中隊長斎藤中尉は、市街戦の命令を発令。

「味方打ちに気をつけろ。十字路では必ず左右の連絡をとれ」

西方から東方に向かって正面広く逃走する敵は、応戦しつつ、ついに市街に火を放った。

兵舎が、学校が、弾薬庫が、そして燃料タンクが、ジリジリと焼けつくような無風の空に、黒煙を吹き上げ、そしてマンゴ樹も、椰子樹も、マンゴスチンも、また美しい花畑ともに焦がしながら

ら炎上していく。

トンダノ湖対岸の道路を、敵のトラック、バス、乗用車が、散を乱して、山地の方向へ遁走して行く。ぬしを失った鶏や豚が、敵味方陣内の区別なく逃げ惑っている姿は滑稽だ。かくて二中隊は、カカス市街および水上機基地を完全占領し、トンダノ湖棧橋に軍艦旗を掲揚した。

おりしも、味方九七大艇二機が、砲隊、医務隊、報道班員を乗せて着水した。

湖には、敵の水上機が、味方零戦にやられて、尾部や翼を覗かせ、醜い残骸を暴^ましていた。

味方死傷者のため、堀内部隊長はただちに大艇と連絡をとり、負傷者の手当を始めさせた。ミナハサ高地には、ようやく夕闇が迫ってくる。

「今夜は必ず敵の逆襲があるぞ」

「哨兵配備を固める」

付近の民家から木材や南京袋を持ち出して土壘陣地を造り、銃の射界を定めてこれを固定し、哨兵配備に就いた。

敵の搜^さりであろう、ときどき、銃声が聞えるだけで、南国の夜は静かに更けていった。だが南国とはいえ、疲れた身体には七百メートルの高地の夜は、震えるほど寒かった。

まさに戦止んで、日は暮れて、のシーンである。酒をぐっと一杯飲みたいと思いつながら、戦死した戦友のおもかげが、悲しい、淋しい感傷とともに、胸中を去来するのを禁ずることはできなかった。

戦友の霊よ安かれ、仇は俺が討ってやるぞ。自らの心に鞭うちながら、こう誓うのであった。
翌一月十二日。

九六式輸送機隊が、再び轟々たる爆音とともに増援部隊を降下させていった。メナド富士を背景に、美しいまさに一幅の名画にも似た光景であった。

ケマ港、メナド港方面に敵前上陸して、追撃中の味方海軍連合陸戦隊の前衛戦車隊と遭遇し、ここに落下傘部隊は友軍との連絡をとれるに到り、セレベス島北西部を確保することになったのである。

この日の夕、早くも味方中攻隊はランゴアン飛行場に着陸して来た。

白馬に乗って、解放の神がやって来る

更に明けて一月十三日。

夜間、味方戦死者の遺骸を焼くその火が、煌々^{キラキラ}と明け方まで椰子林をこがしていた。

市街地の住民も馬車に乗って次第に帰って来たが、最初は老人、老婆が多かった。

ある日新木兵長が、石井三水、菅原三水とともに哨兵に立っていると、その前に馬車がとまり、背広を着た紳士風のインドネシア人が降りて来た。

おすおすと近寄ってきた彼等は、その顔の皮を引張って、

「トアン、ジャパン、オラインドネシヤ、ムカ、サマサマ（日本の旦那様も私たちも、顔も色も同じですね）」

といいながら、新木兵長の手の皮をつまみ出した。喜ばしいような油断のできないような変な気持で、新木兵長もマレー語の本を取り出して、

「ジャパン、ソルマードーサマチンタ、オラン、インドネシヤ（日本軍人は、貴方たちを可愛がります）」

と応答してやった。

彼等は喜んで立ち去ったが、こうして住民はほとんど帰って来た。

二月初旬、残敵がときどき市街に出没し、親日インドネシヤ人や有力者にテロ行為をやりだしたので、堀内部隊は住民のスパイを使ってこれの探偵に努力し、これらを掃蕩することにした。

ついに、カカス東方山中に敵の秘密兵舎を発見した。大隊本部からは、極力敵を捕虜にして来いとの命令を受け、逆スパイを防ぐため、二中隊の十数名で暗夜ひそかに行動を起した。タッカ部落から住民のスパイを案内者として先頭に立て、逃げられては困るので、彼の胴に蠅を着けて落下傘兵の一人がこれを持った。

間もなく山道の密林地帯に入った。螢が飛びかい、名も知れぬ怪鳥の啼き声が聞え、トカゲが走り回って薄気味が悪い。

夜中の二時頃、二棟の敵仮兵舎を二隊に分かれて包囲し、声を忍んでジリジリと接近して行った

ところ、突然、三頭の番犬に吠えられてしまった。すわ感づかれたか……、眼前の兵舎へ岩岡兵曹が突っ込んだ。そして寝ぼけて狼狽する敵兵と、一緒に寝ていた女を有無をいわず縛り上げて、兵器を外に放り出してしまった。

新木兵曹、新木兵長ほか数名は、他の兵舎目がけて急坂を駆け下った。

バ、バ、バ……。暗夜に閃光を発して敵機銃弾が発射された。敵前十メートルくらいか、味方は身体をぶつけるようにして、咄嗟に傍の木の根に伏せた。

先頭の新木兵曹は、急坂のため行き脚が止らず、そのまま敵兵に打ち当たって、敵と組み討ちの格闘が始まった。敵味方二人は組み合ったまま真暗な急坂をおおもゴロゴロ転がって行ったが、柔道三段、腕っぶしの強い新木兵曹は、ついに敵の首を絞め上げ、銃剣でこれを刺殺してしまった。敵はオランダ軍の将校とのことだった。

射撃する新木兵長の身体すれすれに敵弾が飛ぶ。突然、ガーンと頭を殴られたように思ったら、顔面に血が吹き出している。敵弾が新木兵長の頭を擦ったのだ。

敵の反撃は、女を守っているためか必死だった。高橋小隊長ほか全員十数名が集合し、一斉に手榴弾を投げる。

シュ、シュ、シュ……。

手榴弾は尾を曳いて飛ぶ。

ガ、ガ、ガ、ガーン……。

火柱を上げて炸裂したとたん、ピタリと敵の射撃が止んだ。

「用意、突っ込め！」

逃げまどう敵を手当り次第突きまくった。一部の敵兵は、断崖を飛び降りて何か叫びながら遠ざかって行った。

味方はただちに兵舎に火を放ち、敵捕虜を引っ張って山を走り下った。

落下傘部隊が占領したランゴアン飛行場には、すでに味方機が一杯に列んでいた。

その後、数次にわたって残敵の掃蕩を行い、多数の捕虜も得たが、そのつど味方の戦死者も増えていった。

三月十三日。

ランゴアン飛行場西方のトンパソ部落に、敗残兵が出没し、親日土人部落をつぎつぎに襲撃して、部落民を殺し、家を焼き払うので助けてくれと、現地民が救いを求めてきた。

早速、二中隊から二コ分隊を出し、トラックで現地に急行、アムラン山中の隘路で敵と遭遇、これを追って谷間に入ったところ、突然、両側の山頂から、挟撃の射撃を浴びせられ、佐々木上水は頭部を貫通されて即死。これにひるまず味方は反撃して、数名の捕虜を捕え、他は全滅させた。

オランダ兵の捕虜の中の一名は、夜、負傷した戦友のオランダ兵の手や首を斬って殺し、自らも首を吊って死んでしまった。

敵ながら、天晴れ武人であるのに感心し、ねんごろに葬ってやった。

殺されたこの敗残兵の中には、カカスに妻を持っていた土民兵もいたが、その若妻の嘆きを見て、敵とはいえ、可哀想でたまらなかった。

そういえば、佐々木上水（第二期研究員）も気の毒なことをした。彼は真面目な男で、外出の日でも、横須賀の下宿で必ず勉強をしていた。当時二十歳の彼の純情な胸には、いつも一枚の写真が、肌身離さず秘められていた。横浜に、十七歳になる婚約者がいたのだ。

その写真の主の婚約者の嘆きも、この殺された土民兵の妻の嘆きも、民族は違っても、やはり同じであるに違いないのだ。

掃蕩戦での血なまぐさい嫌やな思い出も、死んで行った敵味方を憫んでの悲しい感傷も、人間である以上避けることはできないだろうが、これと同じく、人間であるからには、ことに青春を謳歌すべき若人であっては、甘い楽しいロマンスも、避けることはできないであろう。

カカス市街の若いインドネシアの娘さんと若い落下傘兵の間には、いつしか恋愛に似たものが芽生えてもきていた。

ミナハサの娘さんたちは、われわれ日本人と同じ皮膚の色で顔も美しく、なんとなく好感が持てる。服装はワンピースで、土曜日以外ははだし、早熟で十五、六歳で一人前。

日本人が好感が持てるなら、向こうでも同じ好感が持てるのか、娘さんたちの方から、十八、九から二十歳ぐらいの若い落下傘兵へ、

「サヤチンタサストワン」(アイ・ラブ・ユー)と求愛してくること少なからず、落下傘兵のうぶな者は、いささか困惑させられていたようだ。落下傘部隊が、小スンダ列島^{タテ}戡定作戦のため、セレベス地方を離れるとき、落下傘兵の乗ったトラックに、泣いてすがった娘さんもあったほどだ。こんなロマンスのある一方、この地方は一般に女尊男卑の風習が強く、女性の頭はなかなか高かった。

そして、中には哨兵の前に来て敬礼しないものもいた。

かねがね、これを小癪に思っていたし、また頭部を負傷して気が立っていたためか、新木兵長は二、三人の婦人をぶん殴ってしまった。たちまち悪評が飛んだ。

「トアン、アラキ、オランジャハ」(新木は悪人だ)と。

ところが、トアン新木はまた、日曜教会に集まる貧乏な現地民に金を恵んだり、殺された現地民を埋めたり、あるいは白骨となった敵兵に花を供えたりもしたので、これがカカス郡に知られたら、トアン、アラキ、オランパイ(新木の旦那は善人だ)と汚名を挽回し、市街を歩くと礼をいわれたり、民家でご馳走攻めにされたりした。

ヒエルトンという少年を団長に、ヌマリーという少女を副団長として、少年少女団を作り、これに日本語や日本の歌も教えたりもした。

こうして、現地住民の部落には、朝夕、日本の歌が聞え、娘さんたちは花束を抱えて、病院の落

下傘兵を慰問し、また戦死者の墓には、花が絶えることがなかった。

平和な、幸福そうな日だが、このミナハサ地方に訪れていた。

ランゴアン飛行場北方には、すでに全戦死者の墓が建立され、告別式も終っていた。林立する白木の墓標の階級は、全員二階級特進のものだった。

飛行場に目を転ずれば、轟々たる爆音の中に、中攻隊、零戦隊の銀翼が整然と並び、椰子林は切り倒されてその跡に幕舎が建ち、激戦の面影はすでに認められない。

現住民は、ジュンボール、トアン(素晴らしい)と親指を出して落下傘兵を笑わせる。土曜日ともなれば、広場には現住民の若い男女が集合して、楽しそうにダンスに打ち興じている。

インドネシア独立の歌が聞えてくる。セレベスのインドネシア人が、われわれ落下傘兵に歌って聞かせ、教えてくれた。

われわれもインドネシア語のまま、これを覚え、よく合唱したものだ。

インドネシア、タナアイルク

タナトンパ、ダラク

リシヤラナラ、アクバリリ、

マンジャガ、パナルイブク

インドネシア、ラヤムリヤムリヤ

ヒルプラ、インドネシヤラヤ

インドネシア、ラヤムリヤムリヤ

タナクバンサク、サムワ

白馬に乗って、北から我等の神が、開放に来る——という意味だそうである。

これが迷信であり、白馬が何者であろうとも、自由なき植民地人の希求するものがなんであるか、それだけは判るのである。

〔注〕落下傘部隊の作戦について、落下傘部隊輸送機側から見た詳細な記録が当社刊「炎の翼」関根精次著にありますので、あわせてお読みになることをおすすめします。

東京の石野さんから郵便小包が届きました。中身は前掲、山辺雅男著「海軍落下傘部隊」。昭和17年1月(1942年)帝国海軍によるメナド進攻作戦のクライマックスとなる「第三章メナド降下作戦」部分のコピーでした。

落下傘部隊のメナド降下作戦に関して私はこれまでに2篇の文章を読んでいます。1篇は、ある新聞記者(メナド作戦当時の従軍記者)の報道記事です。戦時中の報道記事ですからいろいろ表現上の制約もあったかも知れませんが、楽勝気分で書かれていました。その新聞は日本の大手新聞のひとつですから、多くの日本人がそれを読んでメナドは簡単に攻略したものだと思ったことでしょう。

あと1篇は本会会報の特集号(第8号であったか)で読みました。メナド作戦からちょうど1年後の朝日新聞のインタビュー記事のコピーです。談話の主は実際に落下傘部隊を率いた堀内豊明中佐。(当時は部隊長の任をはなれ内地勤務)。話の趣旨は、「副官はじめ多くの犠牲をはらって遂行されたメナド作戦が、巷間、いかにも簡単に成功したかのように思われているのは不本意なことである。これでは死んだ部下がうかばれないから真実をつたえたい」ということでした。新聞などマスコミが楽勝ムードをあおっていることに対する異議申し立てであったかもしれません。

今回、石野さんからのコピーで3篇目の文章を読んだことになります。執筆者は直接降下作戦に参加したのではありませんが、部隊編成のはじめから重要なポジションにあったようで、攻撃隊発進地であるミンダナオ島ダバオまで同行しています。降下作戦については参加兵からの聞き取りと戦闘報告に基づいて書いたとのことですが、読みながら目のまえに鮮血が飛び散るのを見る思いでした。昨年暮れのNHKドラマ坂の上の雲、203高地の攻防戦を思い出しました。

過日、日本からの慰霊団(元山戦闘機隊関係者)といっしょにランゴワンの飛行場跡の慰霊に参加しましたが、のどかな田園風景から過去の激戦のようは想像もつかず、予備知識もありませんでした。

読みながらニンマリした箇所がひとつありました。ミナハサ人は女尊男卑であるということです。会員の皆さんご承知のとおりです。昔からそうであったのですね。「女尊」というより女性が勝手にいばっているだけでしょうが。

オランダ軍との戦闘が一段落した後、さっそく子供をあつめて日本の歌を教えた、ということも、いかにも日本人がやりそうなことです。いまミナハサ地方で結婚式など祝い事によべられたら、村のバンドによって必ずといっていいほど「愛国のはな」の演奏または歌手による独唱があります。

日米開戦(即オランダとも)しょっぱなのメナド進攻。現地住民には迷惑な事件であったことですが、落下傘部隊がチモール島への転進で出発する日は、大勢の住民が泣いて別れを惜しんだということです。

チモール島へ渡った落下傘部隊はその後サイパン島へ転進し、昭和19年(1944)6月、サイパン陥落で全滅となりました。メナド攻略時の部隊長・堀内豊秋は内地勤務となって終戦まで健在でしたが、メナドのオランダ軍事裁判に呼びだされて銃殺刑となりました。(前掲文には絞首刑とあります)。銃殺されるにあたって、目隠しの鉢巻も断って、銃手と対面しての堂々たる最後であったそうです。死後しばらく、テーリン墓地内に住民有志が建てた墓に祀られましたがその後遺骨は日本に還りました。

日系人メモ・・・大岩勇の遺産

近年はカツオ資源減少のためか調子が悪くなっていますが、近年までビトゥンの基幹産業といえばかつお釣り漁業（カツオ節加工業とセット）でした。北スラウェシ・ビトゥンにかつお産業を興したのは日本人漁業者たちですが、その漁業者の中心にいたのが愛知県出身の大岩勇とっていいでしょう。今回は大岩勇について、主に彼の長男・大岩富さんからの聞き取りによって略歴を記します。

大岩勇（いさむ）は明治35年（1902年）愛知県豊浜の中川家の三男として生まれました。のちに、父親の友人である大岩家へ養子に出されて大岩姓となります。実家である中川家の親戚筋に横浜で造船業、鉄工所を営む者があって、若いころの勇はその造船所で船大工として腕を磨きますが、新天地南洋への雄飛を志し、昭和4年（1929）ごろパラオへ渡りました。

パラオ群島を含むミクロネシアの島々は第一次大戦後（大正4年・1915）に日本の委任統治領となりました。（その前はドイツ領土）。勇がパラオに渡った昭和初期というのは政府の南進政策によって、特に漁業（かつお節）、農業（砂糖）の分野で南洋進出がブームになった時代です。

当時、セレベス島（スラウェシ島）は「蘭印（蘭領東印度）」とよばれるオランダの植民地でした。オランダ領ながら明治の末期ごろからすでに日本人商人や漁業者などが進出していて、かつお釣り漁業（カツオ節加工）も興りつつありました。勇はパラオ滞在中に、今まさに興りつつある北セレベスの状況を伝え聞き、若い野心をくすぐられたかも知れません。パラオはほとんど素通りのかたちで北セレベスにやってきました。

現在、パラオと北スラウェシは交通のつながりもなく、お互い何の接点もないようになっていますが、昭和戦前期は状況が違っていました。当時、まだ商業航空便がない時代に、一般の交通・輸送手段といえばまず船便です。日本が開拓をはじめた南洋の島々への交通手段として、日本本土（横浜・神戸・門司）から小笠原（父島）パラオを経由し日本郵船の大型貨客船がダバオ、メナドまで航路を伸ばしていました。この航路は南洋開拓の幹線航路で「命令航路」ともよばれていました。南進の国策航路として政府が「命令」して開設させた航路というわけです。国策航路はミクロネシアの要衝パラオからさらに南西方向にのびて、日本の領土外であるミンダナオ島南部（ダバオ）や、さらにその南のオランダ植民地北セレベスのメナドまで伸びていました。ダバオには、主にマニラ麻栽培に従事する日本人が入植し、北セレベスにはカツオ漁業を中心に日本人が増えつつあり、メナドには日本領事館も開設されている時代です。

セレベス島にやってきた大岩勇は船大工の腕を活かしてメナドに造船所を起しました。造船所はトンダノ川がメナド湾に出る河口近く、今のメガワティ橋から河口方向を見て左手のあたりにあったそうです。現在、店舗だか住宅だか判別のつかない建物が密集していて当時の面影は片鱗もない状態です。

勇は、事業を順調に伸ばし、その勢いでビトゥンのかつお釣り漁業（＝かつお節加工業）にも参入しました。造船・修理業は漁船漁業と密接な関係にありますから、勇のかつお漁業への参入は自然の流れであったともいえます。

それにしても、勇はよほど事業家としてのセンスがあったとみえて、沖縄からきた漁業者たちも巻き込んでかつお漁業の事業も大きく伸ばしていきました。当時、南洋のかつお漁業といえば、獲れたカツオをかつお節に加工して日本のマーケットに送り込むことが事業の柱で、日本の市況によって業績が左右されました。日本が不景気になれば南洋の漁業経営も苦しくなるわけですが、ビトゥンの場合は近郊（トモホン、メナドなど）に豊富な消費人口があつて、日本向けの販売より地元販売に力を注ぐことができました。これが事業を伸ばすことができた要因のひとつであったようです。

しかし、当時のセレベス島というのは先に述べたとおりオランダが統治する植民地です。日本が統治する南洋群島（サイパン、パラオ、トラックなどの島々）とは当然ながら事業環境が違います。沖縄出身の漁業者が操業条件の厳しさ（植民地政府による締め付け）に苦勞していたという記録もありますが、大岩勇は独特の才覚でもってハンディキャップを克服していたと思われまふ。のちに太平洋戦争がはじまり日本軍が駐留するようになると、軍のご用達会社としてさらに事業を拡大していますから、彼は天性の外交力、交渉力を備えていたかもしれません。要するに事業家としての資質を備えていたということでしょう。

話はさかのぼりますが、大岩勇がセレベスにやってくる前の昭和2年、鹿児島原の原耕（はら こう）が率いる漁業調査船団（かつお釣り漁船）がメナド・ビトゥン方面にやってきました。同行した鹿児島県水産試験場の技師が記録を残していますが、当時、ビトゥンは人家もまばらな寒村であったそうです。原耕の船団はビトゥンからさらにアンボン、テルナテ方面まで調査操業を行い、マルク海一帯がかつお漁場として有望であることを確認しています。しかし、これから本格的な操業というところで団長の原耕がマラリアに罹りアンボンで客死して計画は頓挫しました。

そのあとで入れ替わるようにやって来たのが沖縄の漁民や大岩勇などで、彼等がビトゥンにかつお産業を興しました。昭和20年8月の敗戦によって日本人による事業は中断しますがその後現地住民の力で再興し、その発展に伴ってビトゥンに人口が増え、町の隆盛につながった、という経緯になります。

現在ビトゥン市街地の入り口に、躍動するカツオのモニュメントがあるように、カツオはビトゥン市のシンボルになっています。そのビトゥンの最初の町興しの中心的な役割を果たしたのが大岩勇であったといえるでしょう。

いきさつがこのような事情ですから、ビトゥンのかつお産業は使用される漁船のスタイル、漁労技術、かつお節加工技術など日本の技術がそっくり移転されて、その遺伝子は今でも色濃く引き継がれています。その点インドネシアの他地域にはない、ビトゥンのかつお産業の特徴となっています。

ところで、大岩勇はじめ日本の漁業者たちが北セレベスに残したのはかつお産業だけではありません。彼等の多くは現地の女性と妻帯して子供をもうけました。

勇の長男大岩富（現地名 TOMI SEMBEN）は昭和6年（1931年）生まれです。勇は事業の発展に並行して子宝にも恵まれ、3男3女をもうけました。住居はメナドの造船所近くの川岸にあって現在も次男三男家族が住んでいます。

長男の富は父親の意向で小学校時代から日本（横浜）の知人宅にあずけられ、日本の教育を受けました。戦局が逼迫した昭和20年3月、学童疎開で長野県の田舎にいた富のところへ父親（勇）がひょっこり訪ねてきたそうです。しばしの面会のあと駅まで二人で歩いて、それが最後の別れになりました。勇は事業に投入するために冷凍運搬船を日本で調達し、それをビトゥンへ回航するために日本に来たついでであったそうです。長男の富と面会のあと、ビトゥンへの航海の途中で米軍機の空襲を受け、船もろとも散華しました。享年43歳。

敗戦間際にはビトゥンも米軍機の空襲にさらされてかつお節工場なども壊滅しました。大岩勇の凶南鵬翼の夢は、太平洋戦争で吹きとばされました。

しかしそれでも、蒔いた種は戦後（インドネシア独立後）に芽をふいて、港町ビトゥンの発展につながったのは前述のとおりです。大岩勇もって瞑すべし。

一世	（大岩 勇）	
二世	大岩 富（TOMI SEMBENG）ほか5名	5名健在
三世		20
四世		26
五世		2（増産予定）

大岩家の末永いご発展を祈ります。

（平成24年1月 長崎）

大使館便り (駐在官事務所)

年末年始には、多くの方が海外へ渡航される時期ですが、海外滞在中に感染症にかかることなく、安全で快適な旅行となるよう、海外で注意すべき感染症及びその予防対策について、以下のとおりお知らせいたします。

- ・海外で感染症にかからないようにするためには、感染症に対する正しい知識と予防方法を身につけることが重要です。
- ・渡航先や渡航先での行動によって異なりますが、最も感染の可能性が高いのは、食べ物や水を介した消化器系の感染症です。
- ・日本での発生が少ない、動物や蚊・ダニなどが媒介する感染症が海外で流行している地域も多く、注意が必要です。また、WHO が排除又は根絶を目指している麻疹 (はしか) 及びポリオは、日本での感染者が減少傾向又は発生が認められていませんが、諸外国では未だに流行しています。
- ・海外渡航を予定される方は、渡航先での感染症の発生状況に関する情報を入手し、予防接種が受けられる感染症については、余裕をもって相談しておくなど、適切な感染予防に心がけてください。

なお、日本国内の空港や港の検疫所では渡航者の方を対象に健康相談を行っています。帰国時に発熱や下痢、具合が悪いなど、体調に不安がある場合は、検疫所係官に相談してください。

また、感染症には潜伏期間 (感染してから発症するまでの期間) が長いものもあり (数日から1週間以上)、帰国後しばらく経過してから具合が悪くなることがあります。その際は、早急に医療機関を受診し、渡航先、滞在期間、飲食状況、渡航先での行動、家畜や動物との接触の有無などについて必ず伝えてください。

1. 蚊やダニなど節足動物が媒介する感染症

渡航先 (国・地域) や渡航先での活動によって、感染する可能性のある感染症は大きく異なりますが、世界的に蚊を媒介した感染症が多く報告されています。特に熱帯・亜熱帯地域ではマラリア、デング熱、チクングニア熱などに注意が必要です。

(1) マラリア

毎年世界中で約 2 億 5000 万人以上の患者が発生し、80 万人以上の死亡者がいると報告されています。我が国では、海外で感染して帰国される方 (輸入症例) が毎年 50 人以上報告されています。

○発生地域：アジア、中南米、アフリカなど熱帯・亜熱帯地域に広く分布

- 感染経路：マラリア原虫を保有した蚊（ハマダラカ）に吸血された際に感染する。
ハマダラカは、夜間に出没する傾向がある。都市部での感染リスクは、アフリカやインド大陸を除き減少している。
- 主な症状：マラリア原虫の種類により7日以上潜伏期ののち、寒け、発熱、息苦しさ、結膜充血、嘔吐、頭痛、筋肉痛など。迅速かつ適切に対処しなければ重症化し、死亡する危険がある。
- 感染予防：長袖、長ズボンを着用し、素足でのサンダル履き等は避ける。虫除け剤や蚊帳を使用する等により、蚊に刺されないよう注意する。特に、夜間の屋外での飲食時や外出時に注意する。2週間以上流行地に滞在し野外作業等に従事する場合には、抗マラリア薬の予防内服を行うことが望ましいとされている。
- 参考情報：
 - FORTH/厚生労働省検疫所「マラリア」
<http://www.forth.go.jp/useful/malaria.html>
 - 国立感染症研究所感染症情報センター「疾患別情報：マラリア」
<http://idsc.nih.go.jp/disease/malaria/index.html>

（2）デング熱、デング出血熱

世界中で25億人が感染するリスクがあり、毎年約5,000万人の患者が発生していると考えられています。

我が国では、海外で感染して帰国される方（輸入症例）が毎年約100人報告されています。2010年は245人の患者が報告されており、インド、フィリピン、インドネシアでの感染事例が増加しているため注意が必要です。2011年現在、80例以上が輸入症例として報告されています。

- 発生地域：アジア、中南米、アフリカなど、熱帯・亜熱帯地域に広く分布。
- 感染経路：ウイルスを保有した蚊に吸血された際に感染する。媒介蚊は日中、都市部の建物内外に生息するヤブカ類である。
- 主な症状：突然の発熱、激しい頭痛、関節痛、筋肉痛、発疹。デング熱患者の一部は重症化して、出血傾向を伴うデング出血熱を発症することがある。
- 感染予防：長袖、長ズボンを着用し、素足でのサンダル履き等は避ける。虫除け剤や蚊帳の使用等により、屋内及び屋外において蚊に刺されないように注意する。室内の蚊の駆除を心がける。
- 参考情報：
 - FORTH/厚生労働省検疫所「デング熱」
<http://www.forth.go.jp/useful/infectious/name/name33.html>
 - 国立感染症研究所感染症情報センター「疾患別情報：デング熱」
<http://idsc.nih.go.jp/disease/dengue/index.html>

国立感染症研究所「デングウイルス感染症情報」

<http://www0.nih.go.jp/vir1/NVL/dengue.htm>

(3) チクングニア熱

アフリカ，東南アジア，南アジアの国々で流行しており，2006年にはインドで約140万人の感染者が報告されています。

我が国では，2010年に海外で感染して帰国後にチクングニア熱と診断された事例（輸入症例）が，インドネシアから3例確認されています。2011年現在，7例の輸入症例が報告されています。

○発生地域：アフリカ，東南アジア（フィリピン，マレーシア，タイ，インドネシア，シンガポールなど），インド，パキスタン，インド洋島嶼国（スリランカ，モルディブなど）マダガスカル。2007年にはイタリア，2010年にはフランスでも流行。

○感染経路：ウイルスを保有したヤブカ類に刺された際に感染する。

○主な症状：2～12日（通常4日～8日）の潜伏期ののち，突然の発熱，激しい頭痛，関節痛，筋肉痛，発疹。関節痛は急性症状消失後も数か月続くことが多い。

○感染予防：長袖，長ズボンを着用し，素足でのサンダル履き等は避ける。虫除け剤や蚊帳の使用等により，屋内のみならず屋外でも蚊に刺されないように注意する。室内の蚊の駆除を心がける。

○参考情報：

FORTH/厚生労働省検疫所「チクングニア熱」

<http://www.forth.go.jp/useful/infectious/name/name32.html>

国立感染症研究所感染症情報センター「チクングニア熱」

http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k07/k07_19/k07_19.html

国立感染症研究所 ウイルス第一部第2室「チクングニア熱」

<http://www.nih.go.jp/vir1/NVL/Aiphavirus/Chikungunyahtml.htm>

(4) ウエストナイル熱・脳炎

ウエストナイルウイルスが原因の熱性感染症です。このウイルスは，鳥と蚊の間で維持されている感染症です。北米地域だけでも例年数千人の感染者が報告されています。

米国での流行は，例年蚊の活動が活発になる7月頃から始まり，年末まで報告が続くのが特徴です。

○発生地域：アフリカ，欧州南部，中央アジア，西アジア，近年では北米地域，中南米にも拡大している。

○感染経路：ウイルスを保有した蚊（主にイエカ類）に吸血された際に感染する。媒介する蚊は多種類に及ぶ。

- 主な症状：2～14日（通常1日～6日）の潜伏期のち、発熱、激しい頭痛、関節痛、筋肉痛、背部痛、発疹など。感染者の一部は脳炎を発症し、まれに死亡することがある。
- 感染予防：長袖、長ズボンを着用し、素足でのサンダル履き等は避ける。虫除け剤や蚊帳の使用等により、屋内のみならず屋外でも蚊に刺されないように注意する。室内の蚊の駆除を心がける。
- 参考情報：
 - 厚生労働省「ウエストナイル熱について」
http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou18/west_nile_fever.html
 - FORTH/厚生労働省検疫所「ウエストナイル熱」
<http://www.forth.go.jp/useful/infectious/name/name29.html>
 - 国立感染症研究所「ウエストナイルウイルス」
<http://www.nih.go.jp/vir1/NVL/WNVhomepage/WN.html>

（5）クリミア・コンゴ出血熱

- クリミア・コンゴ出血熱ウイルスによる発熱性出血熱を特徴とする感染症です。このウイルスは、ヒツジなどの家畜とダニの間で維持されています。死亡率の高い感染症で、北半球では4月から6月に流行します。特に、中央アジアや中東では、毎年患者が発生しています。
- 発生地域：中国西部、東南アジア、中央アジア、中東、東ヨーロッパ、アフリカ。
 - 感染経路：ダニに咬まれたり、感染動物（特にヒツジなどの家畜）と接触したりして感染する。
 - 主な症状：発熱、関節痛、発疹、紫斑（出血）、意識障害など。
 - 感染予防：長袖、長ズボンを着用し、素足でのサンダル履き等は避ける。また、家畜などにむやみに触れない。
 - 参考情報
 - FORTH/厚生労働省検疫所「クリミア・コンゴ出血熱」
<http://www.forth.go.jp/useful/infectious/name/name38.html>
 - 国立感染症研究所感染症情報センター「疾患別情報：クリミア・コンゴ出血熱」
http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k02_g2/k02_31/k02_31.html

2. 動物由来感染症

「動物由来感染症」とは動物から人に感染する病気の総称です。日本での発生はありませんが、海外では、人に重篤な症状を起こす感染症が存在しています。むやみに動物に触れることは避けてください。

（1）鳥インフルエンザ（H5N1）

H5N1 亜型の鳥インフルエンザウイルスを病原体とする鳥インフルエンザは、東南アジア

を中心に家きん（ニワトリ、アヒルなど）の間で発生しています。

人が感染した場合には、重篤な症状となることが多く、世界保健機関（WHO）によると、2003年11月から2011年11月15日までに世界15か国で570人の発症（うち死亡335人）が報告されています。

2011年も、新たな患者がバングラディッシュ、カンボジア、エジプト、インドネシアで確認されています。

○発生地域：東南アジアを中心に、中東・ヨーロッパ・アフリカの一部地域など

○感染要因：感染した家きんやその臓器、体液、糞などとの濃厚な接触

○主な症状：1～10日（多くは2～5日）の潜伏期間ののち、発熱、呼吸器症状、下痢、多臓器不全など。

○感染予防：家きんやその臓器等との接触を避け、むやみに触らない。生きた鳥が売られている市場や養鶏場にむやみに近寄らない。手洗いやうがいの励行（特に発生国・地域では徹底する）。

○参考情報：

厚生労働省「鳥インフルエンザに関する情報」

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou02/index.html>

FORTH/厚生労働省検疫所「鳥インフルエンザ(H5N1)」

<http://www.forth.go.jp/useful/infectious/name/name54.html>

国立感染症研究所感染症情報センター「疾患別情報：鳥インフルエンザ」

http://idsc.nih.gov/disease/avian_influenza/index.html

（2）狂犬病

狂犬病は、狂犬病ウイルスによる感染症です。人は感染動物（アジアでは主として犬）に咬まれることによって唾液からウイルスに感染し、長い潜伏期の後に発症します。発症すると有効な治療法は無く、ほぼ100%死亡します。世界における死者数は毎年5万5千人

といわれています。感染動物に咬まれたら、直ちに狂犬病ワクチンを接種することにより発症を防げます。

我が国では、2006年にフィリピンで犬に咬まれ帰国後に発症し死亡した事例が2例報告されています。

狂犬病流行地で犬などの動物に咬まれたら、すぐに傷口を石けんと水でよく洗い、できるだけ早く現地の医療機関を受診し、傷口の消毒や狂犬病ワクチンの接種を受けて

ください。また、感染の恐れがある場合には、帰国時に検疫所にご相談ください。

- 2008年11月には、それまで狂犬病の発生がないとされていたインドネシアのバリ島で犬の狂犬病感染例が確認され、発病した犬に噛まれた住民が死亡しています。バリ島での狂犬病流行は継続しており、現在も死亡者が確認されています。
- 2010年2月、米国ニューヨーク市セントラルパーク内でアライグマの狂犬病感染が確認されました。現在、同市保健衛生局はアライグマに狂犬病ワクチンを接種し、犬や猫など他の動物に広がって人が感染するリスクを減らそうとしています。2010年3月には猫の感染事例が1例報告されています。

○発生地域：世界のほとんどの地域。特にアジア、アフリカ（発生がない地域は、英国、北欧の一部、豪州、台湾、ハワイ、グアムなど）。

○感染要因：動物（アジアでは特に犬）から咬まれること。アメリカ大陸では、コウモリにも狂犬病の流行がみられ、狂犬病ウイルスに感染したコウモリに咬まれて死亡する事例が報告されている。なお、その他に感染源とされる動物は、ネコ、アライグマ、キツネ、スカンク等がある。

○主な症状：1～3か月の潜伏期間の後、発熱、咬まれた場所の知覚異常、恐水・恐風症状等の神経症状、飲み込み困難、けいれん）など。

○感染予防：犬等（猫、野生動物等、特に飼い主のわからない動物）との接触を避ける。もし犬等に咬まれた場合は、傷口を石けんと水でよく洗い、速やかに医療機関を受診し、消毒、暴露後予防ワクチンの接種を受ける。渡航地で動物と頻繁に接触する場合には、渡航前に狂犬病ワクチン接種を受けておく。

○参考情報：

厚生労働省「狂犬病について」：

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou10/index.html>

（3）エボラ出血熱

主にサハラ砂漠以南のアフリカ熱帯雨林地域で流行している、ウイルスによる発熱性出血熱を特徴とする感染症です。現在まで、アフリカ西部のコートジボワールとアフリカ中央部で発生しています。2000年から2001年にはウガンダで、2001年から2002年にはガボンとコンゴ民主共和国の国境地帯での流行が報告されています。これらの地域では毎年のように流行が発生しており、さらに、スーダンやウガンダでも流行が発生しています。

○発生地域：アフリカ（中央部～西部）

○感染要因：ウイルスの自然宿主はコウモリとされている。感染したサルなどの血液、分泌物、排泄物、唾液などとの接触でも感染する可能性がある。また、エボラ出血熱

患者に接触して感染する場合が最も多い（院内感染など）。流行地域の洞窟に入ることは感染リスクの一つ。

- 主な症状：2～21日の潜伏期ののち、発熱、頭痛、下痢、筋肉痛、吐血、下血など。インフルエンザ、チフス、赤痢等と似た症状を示す。
- 感染予防：流行地への旅行を避ける。野生動物との接触に注意する。洞窟に入らない。
- 参考情報：
FORTH/厚生労働省検疫所「エボラ出血熱」
<http://www.forth.go.jp/useful/infectious/name/name48.html>

（4）マールブルグ病

マールブルグ病はエボラ出血熱とともに、ウイルスによる発熱性出血熱を特徴とする感染症であり、アフリカのケニア、ジンバブエ、コンゴ民主共和国、アンゴラなどで発生しています。2008年にはオランダ、米国の旅行者が、ウガンダの洞窟に入り、帰国後にマールブルグ病を発症・死亡した事例が報告されています。流行国の特定地域では、ときに大きな流行になる場合があります。

- 発生地域：サハラ以南のアフリカ
- 感染経路：ウイルスの自然宿主はコウモリとされている。洞窟内ではコウモリから排泄されたウイルスが原因となり、経気道感染することがある。感染したサルなどの動物の血液、分泌物、排泄物、唾液などとの接触でも感染する可能性がある。マールブルグ病患者に接触して感染する場合が最も多い（院内感染など）
- 主な症状：3～10日の潜伏期ののち、初期には発熱、頭痛、悪寒、下痢、筋肉痛など。その後体表に斑状発疹、嘔吐、腹痛、下痢、出血傾向。
- 感染予防：流行地への旅行を避ける。野生動物との接触に注意する。洞窟に入らない。
- 参考情報：
厚生労働省「マールブルグ病に関する海外渡航者への注意喚起について」：
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou25/index.html>

3. 諸外国での感染に注意すべき感染症

WHOは、麻疹については「麻疹排除計画」により、ポリオについては「ポリオ根絶計画」により、感染者の減少に取り組んでいます。

日本においては、麻疹は2010年に455人の患者が報告されました。また、ポリオは、30年近くにわたり野生株によるポリオ症例は発生していません。そのため、流行地からの輸入症例に留意する必要があります。

（1）麻疹（はしか）

世界中で年間16万4,000人以上の麻疹による死者がいると推計され、主にアフリカ、

東アジア、南アジアの国々から報告されています（WHOによる2008年時点の推計）。

特に、2011年4月21日に公表されたWHOの情報によれば、4月18日現在、ヨーロッパの

33の国で、6,500例を超える麻疹の患者が報告されています。

○発生地域：2011年は排除宣言が出されている米国、カナダに加えて、患者数が減少していたヨーロッパ諸国やニュージーランドでも患者報告数が増加している。アメリカ、アジアなどの予防接種率の低い国では依然として患者数が多い。

○感染経路：空気感染、飛まつ感染、接触感染。

○主な症状：発熱、咳、鼻水、目の充血・目やになどが2～3日続いた後、39℃以上の高熱と全身に発疹が出る。肺炎、中耳炎、脳炎が起こる場合もある。

○感染予防：麻疹ワクチンの予防接種が有効。日本では1歳になったらすぐに1回目の麻疹風疹混合ワクチンの接種を受け、小学校入学前1年間の間に2回目のワクチンを受ける。2008～2012年度の5年間は、中学1年生と高校3年生相当年齢の人を対象に予防接種を実施している。2011年5月20日から、修学旅行や学校行事としての研修旅行で海外に行くなど、特段の事情がある高校2年生相当年齢の人を対象に定期の予防接種を実施している。

○参考情報：

厚生労働省検疫所「麻しん」

<http://www.forth.go.jp/useful/infectious/name/name62.html>

国立感染症研究所感染症情報センター「緊急情報：麻疹が流行しています」

<http://idsc.nih.gov/disease/measles/index.html>

国立感染症研究所感染症情報センター感染症発生動向調査週報「欧州からの輸入と考えられた麻疹症例」

<http://idsc.nih.gov/idwr/faq.html#201103>

（2）ポリオ

2010年には、世界で1,349人の患者が報告されました（WHO世界ポリオ根絶計画事務局による集計）。日本では、30年近くにわたり、野生株によるポリオ症例は発生していませんが、ポリオ流行地で感染し、帰国後に発症する事例（輸入症例）に留意する必要があります。

○発生地域：流行国は、アフガニスタン、インド、ナイジェリア、パキスタンの4か国だが、周辺国でも輸入症例の発生が報告されている。2010年には、流行国以外の15か国で、野生株によるポリオ患者の発生が報告されており、タジキスタン、コンゴ民主共和国などで大規模な流行が発生した。2011年はパキスタン、チャド等で多数の患者

が報告されており、7月以降中国新疆ウイグル自治区でもポリオの流行が報告されている。

○感染経路：経口感染（感染者の糞便中に排泄されたウイルスが、口から体内に入る）。

○主な症状：感染した人の90～95%は症状が出ずに経過するが、典型的な麻痺型ポリオの場合、かぜのような症状が1～10日続いて、手足に非対称性の弛緩性麻痺（だらりとした麻痺）が起こる。

○感染予防：ポリオワクチンの予防接種が有効。また、流行国では、十分に加熱されていない物の飲食は避け、食事の前には手洗いをを行う。なお、WHOでは患者発生のある国に渡航する場合には、ポリオの予防接種を受けていても、出発前の追加接種を勧めている。

○参考情報：

厚生労働省検疫所「ポリオ」

<http://www.forth.go.jp/useful/infectious/name/name09.html>

国立感染症研究所感染症情報センター「疾患別情報：ポリオ」

<http://idsc.nih.go.jp/disease/polio/index.html>

4. そのほか注意すべき感染症

渡航先や渡航先での行動内容によって、かかる可能性のある感染症はさまざまですが、特に食べ物や水を介した消化器系の感染症（A型肝炎、E型肝炎、コレラ、赤痢、腸チフスなど）は、開発途上国など公衆衛生の整備が不十分な地域で感染することが多く、注意が必要です。生水、氷、サラダ、生鮮魚介類、生肉等の十分に加熱されていない物の飲食は避けましょう。また、生鮮魚介類や生肉等を介した寄生虫疾患にも注意が必要です。

5. 海外の感染症に関する情報の入手

海外の感染症に関する情報は、厚生労働省検疫所及び外務省のホームページから入手することが可能です。出発前に渡航先の感染症の流行状況等に関する情報を入手することをお勧めいたします。また、日本国内の空港や港の検疫所においても、リーフレット等を用意し情報提供を行っていますので、ご活用ください。

○感染症に関するホームページ

■世界各地の感染症発生状況

●FORTH/厚生労働省検疫所ホームページ

(<http://www.forth.go.jp/index.html>)

●外務省海外安全ホームページ > 感染症関連情報

(http://www.anzen.mofa.go.jp/kaian_search/index.html)

■感染症別の詳細情報

- FORTH/厚生労働省検疫所ホームページ 感染症についての情報
(<http://www.forth.go.jp/useful/infectious/name.html>)
- 国立感染症研究所 感染症情報センターホームページ > 疾患別情報
(<http://idsc.nih.go.jp/disease.html>)
- 予防接種に関する情報
 - FORTH/厚生労働省検疫所ホームページ 命を守る予防接種
(<http://www.forth.go.jp/useful/attention/02.html>)
 - 外務省ホームページ > 渡航関連情報 > 在外公館医務官情報
(<http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/medi/vaccine/index.html>)
- 渡航先の医療機関等情報
 - 外務省ホームページ > 渡航関連情報 > 在外公館医務官情報
(<http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/medi/index.html>)

(問い合わせ先)

- 外務省領事局政策課 (医療情報)

電話 : (代表) 03-3580-3311 (内線) 2850

- 外務省領事サービスセンター (海外安全相談担当)

電話 : (代表) 03-3580-3311 (内線) 2902

- 外務省海外安全ホームページ : <http://www.anzen.mofa.go.jp/>

(携帯版) <http://m.anzen.mofa.go.jp/mbtop.asp>

平成24年3月1日
在マカッサル出張駐在官事務所

領事手数料の改訂について

平成24年度の領事手数料が平成24年4月1日から改訂されること、主なものは、下表のとおりとなりますのでお知らせいたします。
なお、下表に掲載されていない業務の手数料については、駐在官事務所窓口にてご確認ください。

旅券関係	10年旅券	R p . 1 , 7 4 0 , 0 0 0 —
	5年旅券	R p . 1 , 2 0 0 , 0 0 0 —
	申請時12歳未満	R p . 6 5 0 , 0 0 0 —
	査証欄増補	R p . 2 7 0 , 0 0 0 —

証明関係	在留証明	R p . 1 3 0 , 0 0 0 —
	出生・婚姻等の証明	R p . 1 3 0 , 0 0 0 —
	署名証明 (官公署以外のもの)	R p . 1 8 0 , 0 0 0 —

査証関係	一般査証 Visa Single	R p . 3 2 5 , 0 0 0 —
	数次査証 Visa Multiple	R p . 6 5 0 , 0 0 0 —
	通過査証 Visa Transit	R p . 8 0 , 0 0 0 —

会員名簿

会報「タルシウス」電子版では不特定多数の方が閲覧するため、セキュリティ上の観点より会員名簿は非公開とすることとしました。

(2014年04月20日)

上記理由により会員名簿が非公開になりましたことをご了承ください。

- 会報タルシウス（製本版）には従来通り名簿は掲載されます。
- 各会員に対しましての個別の、または、尋ね人などのお問い合わせは、

直接日本人会へお問い合わせください。

該当会員に連絡後、会員より直接連絡するか該当会員の同意のもとで、

連絡先をお知らせすることといたします。

編集後記

平成24年も新年を迎えたと思ったらはや2月も半ばとなりました。日本列島は寒気とインフルエンザで震えあがっているようすですが、北スラウエン方面は雨季の最中で、日本人にはちょうどしのぎやすい気候です。ただしこの時期には蚊も繁殖しやすいので、皆さんくれぐれもマラリア、デング熱にご注意ください。

今号の巻頭、新年のご挨拶を呉の大之木さんにお願しました。大之木さんをご高齢のためマネンボネンボの慰霊碑参拝も遠慮されているようですが、個人的な気楽な旅行ならまだまだどこにでも行けます。今年はビトゥン行きもスケジュールに入れてください。

ブナケンの玲子さんにも新年のご挨拶をいただきました。会報発行がおくれて申し訳ないところです。「ブナケンチャチャ」は今年も千客万来商売繁盛です。玲子さん、がんばってください。

昨年第21号発行から今までに4名の入会がありました。曾我ちひろ改め柴田ちひろさんの後任としてビトゥン第2中学校にやってきた大深さん、真珠屋の工藤さん、まぐろ屋の大貫さんと海野さんです。大貫さんから入会挨拶をいただきました。他のご三方は次号で挨拶するという約束です。大深さんは独身のお嬢さんです。ちひろさんの例もありますから、任期中にいいことがあるかもと期待しています。工藤さんはインドネシア人の奥さんを日本に置いての少しややこしいインドネシア単身赴任です。「子供の教育を考えて」この選択となったのでしょうか。真珠養殖業というのは人家もまばらな僻地でしか成り立たない事業です。海野さんはフリーマントルがベースですが、スラウエンもまたにかけてのご活躍です。元真珠貝採りのダイバーという変わった経歴の持ち主です。体験談を語ってもらいたいと思います。

今泉さんと坂口さんはあいかわらず自転車に凝っていますが、メンバーが増えないようです。サイクリングは健康維持と美容にもってこいのスポーツです。体力や熟練度に応じてメニューは作れますから気軽に参加してください。

東京の石野さんから本のコピーが届きました。著者は山辺雅男。太平洋戦争開戦劈頭の落下傘部隊によるメナド降下作戦に深くかかわった元軍人です。本のクライマックスの部分、ランゴワンのオランダ軍飛行場への降下、突入の場面が描写されていますが、目の前に鮮血が飛び散る思いで読みました。落下傘部隊隊長・堀内豊秋中佐については本会会報の第8号でもとりあげられていましたが、戦闘の実際についての詳細は、このコピーではじめて読みました。石野さん、いつもいつもありがとうございます。

長崎さんは去った1月にマーシャル群島マジュロ環礁の椰子の木陰で、酋長の奥さんとまぐろの刺身をたべてまいりました。船ではなく飛行機の旅でしたが、いろいろと感ずることもありました。次号かその次の号に一筆かけたら、と思います。

表紙はいつものとおり羽根井さんです。ありがとうございます。

(長崎)